2010年度
活動報告書

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

2010年度
活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

目　次

Ⅰ．はじめに　04

Ⅱ．2010 年度活動報告

1. コーディネート・オフィス

1）　2010 年度の主な事業　07

2）　広報・発信　09

2. プロジェクト

1)※ 研究関連プロジェクト

文科省大学教育推進プログラム【テーマ A】（教育 GP）
身体知教育を通して行う教養言語力育成　12

基盤研究　17

2)※ 教育開発関連プロジェクト

身体知プロジェクト　20

アカデミック・スキルズ　21

ピア・メンター　22

生命の教養学　23

サイエンス・カフェ　24

教員のためのサポート　25

エディティング・スキルズ　26

3)※ 交流・連携関連プロジェクト

庄内セミナー　27

三田の家　28

カドベヤ　29

日吉行事企画委員会（HAPP）　30

日吉キャンパス公開講座運営委員会　31

Ⅲ．資料編

1. 教養研究センター運営委員会委員　33

2. 教養研究センター組織構成　34

3. 2010 年度の主な活動記録　35

※　1）～3）の分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1 つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを 3 つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

はじめの終わり？――10 歳の誕生日を前に

教養研究センター所長　不破有理

2010 年度を振り返れば、年度を締めくくる 3 月に起きた大震災に言及せずに本報告書をまとめることは難しいでしょう。安易に「未曾有」の災害、あるいは一種の流行語となった「想定外」という表現を用いるのは控えたいと思います。想定外とはそれまでの方法論や知識、積み重ねた努力に対して、あっさりと責任を放棄するような響きがあるように思います。冒頭からなにやら挑戦的な物言いで恐縮ですが、自戒の意味を込めて記しておきたいと思います。人に与えられた予見能力と事態を掌握する力は情けないほど限られていますが、その限界を事が起こった折の被害の甚大さの言い訳にしてはいけないのではないか、ということを。想定外を想定内にするためにはかなりの覚悟をもった知力と行動力が求められるように思います。そのような力を鍛えることはできるのでしょうか。

第二の戦後ともいわれるこの時期、さまざまな職種の人々が各々の分野で被災地の力になろうと試行錯誤しています。大学という研究・教育機関においてはなにができるのか。福澤諭吉の時代においても三陸大津波や濃尾地震が発生し、福澤が創刊した『時事新報』において寄付や支援のあり方を世に問うたことで知られています。教育を与る立場としてできることは、福澤諭吉が戊辰戦争の最中、騒乱の時こそ学問の灯を消してはならないと講義を続けた逸話を引用するまでもなく、右往左往することなく踏みとどまり、今後の日本を担う学生を育成するのが我々に託された課題といえます。社会に学生を送る立場の教員がどのように教育にかかわっていくべきかが真剣に問われているといえるでしょう。

教養研究センターが設立されて 8 年目を迎えた 2010 年度はその活動の軸足も変化しています。「教養」を問う議論から、具体的な教育プログラムのあり方を策定し実践へと動き出しています。2009 年に文部科学省の大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」に採択されたことはこの動きに拍車をかけました。特定研究として立ち上げ、「身体知」と「言語力」を結びつけ、行動する教育への実践をさまざまな形態を通して試行しています。「身体知」の現場は、キャンパスの内外に広がっています。拠点も手法もさまざまです。日吉キャンパスの中で「瞑想」によって自分の身体・心と向かい合うかと思えば、三田キャンパスのすぐ外にある「三田の家」で議論を「調理」する。横浜の動く教室「カドベヤ」では音と舞踊が絡む創作を行い、社会連携の拠点として地域の人々、教員、学生が学ぶ場となりました。キャンパス外での合宿方式の企画は 2010 年度は庄内セミナーとして、鶴岡市や酒田市の協力を得、東北公益大学のスタッフ、学生と寝食を共にしよく学びました。このような活動が学生を育てることになることを念じつつ、教員は活動しています。

10 年目を来年迎えるにあたり、改めて福澤先生の言葉をかみしめています。すなわち、

> 異説争論の際に事物の真理を求むるは、なお逆風に向かって舟を行（や）るが如し。その舟路を右にしまたこれを左にし、浪に激し風に逆らい、数十百里の海を経過するも、その直達の路を計れば進むこと僅かに三、五里に過ぎず。航海においてはしばしば順風の便ありと雖も、人事においては決してこれなし。
>
> （『学問のすすめ』）

このことばは明治維新という、まさに制度変化や価値観の転倒を目の当たりにし、未踏の地に踏み出して新しい地図・海図を描いていかねばならなかった福澤先生の心情をよく表しています。人生において順風が吹くことのほうが少ないのです。明治維新と現代を安易に比較はできませんが、3 月 11 日以降、日本が背負った課題を単なる懐古的な方法による再興ではなく、21 世紀の日本のあり方について再考す

る必要があるのではないかと思います。そのような役割を早晩、義塾の学生たちは担います。社会で浪に揉まれるだけなく、生き抜き、舟を先導する学生を育てなければならないのですから教員スタッフも大変です。教養研究センターを支える創設からの理念は、『「知」の統合、継承、再構築、新たな「知」の創造』です。この「標語」には、それまでの日吉キャンパスでの教育・研究のあり方の枠組みを変えていこうという意気込みが込められています。学部や分野を超える話し合いの場を作り、既定の枠組みを越境することで得られる発想は転換期にこそ生かされるはずです。教員も職員スタッフも学生も共に働き学ぶ場であるからこそ、新たな教育・研究が生み出されることが期待できるのです。標語を実行に移すために格闘した記録が本活動記録です。幸い、センターの活動に逆風があったとは言えませんが、その歩みは、はたから見れば遅々としたものかもしれません。皆さんのご判断を仰ぐ次第です。そして、願わくば、舟の進路を共に照らしていただきご協力をたまわりますように。今後とも多くの皆様からのご助言、ご指導を心よりお願い申し上げます。

大学教養研究センター組織構成と主な事業（2010年度）

教養研究センター運営委員会　　外　部　評　価

コーディネート・オフィス

所長、副所長、事務長
コーディネーター（事業推進者）

所長・副所長連絡会

広報担当

＝2010年度の主な事業＝

1．研究関連プロジェクト

1）大学教育カリキュラム研究（基盤研究）
2）身体知プロジェクト（基盤研究2010年度は＊「1．研究３」との連携で行う）
　i　実験授業「体をひらく、心をひらく」
　ii「芸術教育を考える」
3）特定研究
　大学教育・学生支援推進事業【テーマＡ】大学教育推進プログラム
　「身体知教育を通して行う教養言語力育成」
4）一般研究　（2010年度はなし）
5）研究報告会、特別セミナー、シンポジウム、選書

2．教育開発関連プロジェクト

1）導入教育授業の開発
　i 極東証券寄附講座
　「アカデミック・スキルズ」
　「生命の教養学」（「サイエンス・カフェ」を含む）
　「身体知：創造的コミュニケーションと言語力」
　ii　「身体知研究実験授業」＊「１．研究３）」と合同
　iii　各種「実験授業」＊「1．研究３）」との連携
　iv「庄内セミナー」
2）「学び場」プロジェクト
　i　ピア・メンタリングシステム
　ii　ピア・メンター自主企画
　iii　アカデミック・スキルズ公開講座
3）社会人教育のための授業開発
　i「日吉キャンパス公開講座」
　ii「寿大学」＊「1．研究３」との連携
4）教員サポート

3．交流・連携関連プロジェクト

1）センターとしての地域・社会との連携のあり方を考える
　「日吉の家・三田の家」「寿プロジェクト（寿拠点「カドベヤ」）
2）日吉行事企画委員会（ＨＡＰＰ）
3）日吉キャンパス公開講座＊「２．教育開発３）」と合同

コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関である。約20名のコーディネーターから構成されている。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっている。教職一体で運営を担うのが教養研究センター設立からの理念であるが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスである。

コーディネート・オフィス

2010年度の主な事業

教養研究センターは2009年度から本格的にプロジェクト主体の組織となり、より機動性のある組織として多くの活動を展開している。本センターの活動は1．研究、2．教育開発、3．交流・連携関連に大別されている。概略と共に以下の活動報告で網羅できなかった点を中心にまとめることとする。活動の詳細は各報告項目を参照していただきたい。

2010年10月1日より横山千晶から不破有理へ所長が交代となり、2011年度にむけての事業計画の変更が行われた。本活動報告は2010年度前半の事業計画に則り、実施した活動の報告である。

1．研究

本センターの活動は基盤研究と特定研究があり、基盤研究においては「大学教育カリキュラム研究」と「身体知プロジェクト」を実施した。前者の研究プロジェクトでは日吉キャンパスに限らず導入教育や教養教育にかかわる教員に広くアンケートを実施したことが特徴である。結果はカリキュラム検討にむけて始動している学内委員会への資料に資する予定である。「身体知プロジェクト」は2005年以来定期的に研究会を開き2006年からは毎年継続的に実験授業を行ってきた。このような活動が実を結び、2010年度は夏の集中講義が正規授業として始まった。さらに、2009年度に文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」(教育GP)に採択されたことを受けて、「身体知」をさまざまな教育プログラムで展開する試みが本格化したのが2010年である。

特定研究では「身体知」を通して言語力を育成する実験授業や一連のワークショップなどが企画された。身体知の実験授業は春の日吉キャンパス公開講座では「理系・文系・ダンス系――生きること、学ぶこと、動くこと」や「体と頭でハムレット――演劇と映画」(横山千晶企画)など6月だけで3本の企画が走り、さらにシェイクスピアを題材とした身体知実験授業は7月にも開催された。古典を題材として身体を用いて教養言語力を体得する試みが「狂言」やシェイクスピア、さらにアルフレッド・テニスン「シャロットの女」(Alfred Tennyson, “The Lady of Shalott”)の一連のワークショップにおいて展開し、参加者・講師ともに文学素材を教育の場で用いる際の新境地を開く機会となった。

「THIS IS KYOGEN――言葉×身体×感性」は徳永聡子が企画した。学生が狂言の舞台開催準備と7月2日当日の運営に携わることによって、芸術言語力・表現力・発信力の育成を目指した。9月6日～8日に開催された3日間のテニスンの「シャロットの女」は解読編・分析編・創作編の三部構成で大学の内外の参加者に公開された。アーサー王研究の専門家アンドリュー・リンチ教授と不破が解読編を担当し、分析編ではストーリー分析の小関章ラファエル氏、創作編では文学座俳優・脚本家の瀬戸口郁氏が実技指導を担当した。さらに本テーマのワークショップは10月27日に日本を代表するオイリュトミスト・舞踏家の笠井叡氏を迎え、身体と言葉の融合の場を体験することとなった。笠井氏がテニスンの詩の言葉を舞いによって紡いでゆく圧巻の映像はDVD作品として保存されている。

詩の朗読が創造を生む現場は現代詩ワークショップ、10月29日の日吉詩祭(吉田恭子企画)においても開花した。この詩の祭典は日・仏・英の多言語を横断し、オープンマイクでは事前に募った参加者たちが自作・他作の詩を聴衆の前で朗読し、朗読が身体知であることを示す企画となった。ゲストには野村喜和夫、フォレスト・ガンダー、中保佐和子ら錚々たる現代詩人が一同に会し朗読パフォーマンスを披露した。

身体知としての音楽教育を考えるプロジェクトも進行した。本センターの研究の特長は実験授業を通して、教育への還元を企図している点である。教養研究センターでは、日吉音楽学研究室との連携によって、慶應コレギウム・ムジクム演奏会の活動を継続的に展開している。身体知としての音楽教育は、これまで総合教育科目「音楽」としてだけでなく教育GPの一環の実験授業として小編成器楽・声楽アンサンブル実践と言語知の獲得を目指している。音楽の授業においては、器楽と声楽のグループを編成し、プロの演奏家による指導を得て、成果発表演奏会が開催された。横浜市との連携コンサートとして2010年12月にはハイドンの弦楽四重奏曲が石井明の指導によって、またクリスマスコンサートが佐藤望のオルガンと指揮によって開催された。2011年1月には合唱団とオーケストラによってシュッツ『マニフィカト』、ハイドン『天地創造』が演奏され、多くの聴衆を魅了した。本プロジェクトは、歴史的音楽の身体的体験・実践を通じて、歴史文化の理解とより高度な教養言語力の育成を目指している。

2．教育開発

身体知を通した言語力育成の理論構成と実践の試みは実験授業やワークショップによって実施された。その他に極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」の拡充にむけて2010年の後半から諸活動を開始した。まず広報面の充実があげられる。本センター事務長柴田浩平の発案により、アカデミック・スキルズの応募者数の漸減傾向を食い止めるべく、新年度の学生リクルートのためにパンフレットとポスター、さらにプロモーション映像を作成した。担当教員と履修学生、OBが本科目の特長を語り、アカデミック・スキルズの一年を通した活動とその集大成であるプレゼンテーション・コンペティションの模様を紹介した。YouTubeにも掲載することで、慶應義塾に将来入学する高校生諸君への広報活動に貢献するものと期待している。

授業内容の拡充については、アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ「知の基礎を築く」には「英語版」が、Ⅲ・Ⅳには「実地調査」の講座が新設された。これは学問手法の多様化に対応するためであり、また発信言語として英語のスキルの必要性に基づく改訂である。

またアカデミック・スキルズの修了学生による学生へのレポートの書き方などの学習の相談に対応するシステムが本格化した。ピア・メンター制度「学習相談アワー」と呼ばれ、全国でもほとんど例を見ない画期的なシステムだが、2010年度は相談件数がやや伸び悩んだ。2011年1月下旬にピア・メンターを務めた学生諸君と日吉図書館の和田幸一、本センターのスタッフを交えて現状の課題と今後の具体的な対策を立てた。広報の徹底とアカデミック・スキルズの授業運営との連携強化を進める。

3．交流・連携関連

2010年度の活動は大きく分けて、「身体知教育の展開」と「キャンパス内外の場の創造」である。後者はセンターが常に目指す新しい教育のあり方を、場作りから支援する活動である。教育GPのプロジェクトとして横浜市寿を拠点とする「カドベヤ」と三田のキャンパス外に設けられた「三田の家」がある。

前者は横浜市のNPOとの連携を得ながら準備した拠点で歴史的に特異な地域に近い。横浜には明治時代の欧風の町並みを誇る山手・元町地区と、21世紀を志向した「みなとみらい」地区という表の顔、そしてそのすぐ裏に存在する寿という特殊な地域がある。その狭間に設けられたのが「カドベヤ」である。2010年4月にカドベヤを「新装オープン」させ、週1回定期的かつ地道な活動を続けている。「動く教室～体と頭を刺激する健康コミュニティ」は「和」の舞いを活用した動きを取り入れるなど身体を動かすワークショップ形式の授業で、音楽家、ダンサーなどの参加者を得て、徐々に地元の方々との交流も生まれている。

「三田の家」はここ数年、社会・地域連携プロジェクトとして慶應義塾150年記念事業「未来先導基金」の助成も受け、三田商店街や港区と連携をすすめてきた。2010年度は「三田の家：21世紀的学生街の創出に向けて」と題して義塾からの助成を得、地域の方々と三田・日吉の教員と学生が共に、キャンパスの中では実現不可能な「家」という空間創りを目指した。文字通り土台作りから手がけ、言葉を紡ぎ料理を創り共に食する空間を築いた。その活動の様子は『黒板とワイン』と題名も内容も洒脱な著作としてまとめられた。三田のゼミの活動拠点としても利用され、また留学生たちの寄り合い場であり学び場としても活用された。曜日ごとの担当教員がおり、留学生が抱える学習や人間関係構築の難しさや悩みを汲み上げ、キャンパス外の家族的空間によって解決への糸口をつかむことができる。横浜と三田では地域の事情は異なるが、両者に共通する考えは新しい学びの場の創造である。さらにキャンパス外での学びの場として、庄内セミナーも貴重な機会を学生に提供した。山形庄内で育まれた新米ブランド「つや姫」がデビューした2010年に庄内で実施されたフィールド活動は地元の方々、慶應義塾、日吉と鶴岡タウンキャンパス(TTCK)のスタッフ、東北公益文科大学との連携によって学生を育む企画となった。

4. Hiyoshi Research Portfolio（HRP）2010への参加

「『知』をめぐる社会との交流・協働の場―― 日吉キャンパスの研究・教育」へ4パネル参加しWeb上で公開された。

■ アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ――批評と創作(佐藤元状)

■ 慶應カドベヤ「動く教室」フィールドワークと地域連携(武藤浩史)

■「本当に本が好きになるために」エディティング・スキルズの試み　(笠井裕之)

■ 身体知教育を通して行う教養言語力育成　アーサー王ワークショップ　テニスン「シャロットの女」読んで、体感して、作ってみよう(不破有理)　(不破有理)

広報・発信

教養研究センター（以下「センター」）は、2010年10月に新しく不破有理所長を迎え、組織や研究プログラムの見直しを行った。それに伴い、センターのパンフレットを刷新した。また、教育活動の認知度アップを目指して、極東証券寄附講座3授業のパンフレットおよびアカデミック・スキルズのプロモーション映像を作成した。一方、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に採択された慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業（以下「教育GP」）は2年目にあたり、今年度はじめて年度を通してさまざまな企画が動くこととなり、関連報告書も出版された。最後に、教養研究センター選書に新しく3冊が加わることとなったが、「生命の教養学」同様、東日本大震災の影響で、発行日が次年度へ持ち越しとなった。

当センターの刊行物は、極東証券寄附講座関連の書籍と教養研究センター選書以外は、すべてセンターのホームページで閲覧が可能なので、興味のある方はぜひご一読いただきたい。

■ 教養研究センター刊行物紹介のページ
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/journal/index.html

1．Newsletter（ニューズレター）

■ Newsletter（ニューズレター）16号 2010年7月15日発行

■ Newsletter（ニューズレター）17号 2011年1月15日発行

年二回刊行のNewsletter（ニューズレター）は、主に日吉所属の教職員にセンターの活動を周知する広報誌である。16号の特集は「教養研究センターを斬る！」自然科学教育研究センター、システムデザイン・マネジメント研究科、慶應義塾高等学校、および三田学部の先生方に、センターの活動についての忌憚のないご意見を述べてもらう、という大胆な企画である。17号は新しい執行部のテーマのひとつ、研究と教育の循環する環境作りをフィーチャーする「知への扉を開くとき」が中心の紙面作りとなった。表紙は先代に引き続き、15世紀フランスの写本『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』からの暦挿絵が使われている。

2．ＣＬＡ－アーカイブズ

■ アーカイブズ23「2009年度基盤研究　身体知プロジェクト研究会報告『体をひらく、言葉をひらく――わたしたちの物語を紡ごう』」2010年10月29日発行

■ アーカイブズ24「『身体知教育を通して行う教養言語力育成』2009年度シンポジウム報告書」2011年2月22日発行

2010年度2冊刊行されたCLA－アーカイブズはどちらも「身体知」に関連した教育・研究の報告であり、教育ＧＰの活動報告の一環でもある。教育ＧＰの広報・発信はホームページからも行っており、進行中のイベントや企画については、是非こちらも参照していただきたい。

■ 教育ＧＰホームページ
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/

3．報告書

■「教養研究センター 2009年度活動報告書」2010年8月16日発行

■「2010年度『庄内セミナー』報告書」2011年3月21日発行

2010年8月31 日～9月3日酒田市で開催された庄内セミナー（元・鶴岡セミナー）では、「芭蕉が見た庄内の生命（いのち）」がテーマだった。参加学生の4グループにＯＢの飛び入りも加わり行われた計5組のプレゼンテーションが報告書の読みどころとなっている。

4．アカデミック・スキルズ、生命の教養学

■「こういう授業があった!!　アカデミック・スキルズ　慶應教養研究センター」
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/academic/

より多くの一年生に実験授業「アカデミック・スキルズ」に興味を持ってもらうため、授業紹介のパンフレットとプロモーション映像を作成した。映像はネット上でも配信している。パンフレットは塾内外の広報資料に汎用できる仕上がりとなった。

2005年度より毎年刊行されている「アカデミック・スキルズ学生論文集」は、実験授業「アカデミック・スキルズ」で提出された論文を学生が編集し刊行したものである。

同じくシリーズ刊行化されている極東証券寄附講座「生命の教養学」講義集は、前年度のオムニバス講義をまとめたもの。2009年度のテーマは「『ゆとり』と生命をめぐって」であった。詳細は23ページを参照していただきたい。

５．教養研究センター選書

2003 年に第一号が刊行された選書に、2010 年度は 3 点が加わった。

■ 金田一真澄著『身近なレトリックの世界を探る―ことばからこころへ』

■ 浮世絵ってどうやってみるんだ？会議編『触れ、語れ――浮世絵をめぐる知的冒険』

■ 原大地著『牧神の午後――マラルメを読もう』

（以上すべて 2011 年 5 月 20 日発行）

『身近なレトリックの世界を探る――ことばからこころへ』は、古今の宣伝コピーを題材に日本的やわらかな説得術を修辞学の視点から解き明かす。

『触れ、語れ――浮世絵をめぐる知的冒険』は、多彩な寄稿者が視覚障害者による絵画鑑賞の方向性を、理論だけでなく実践としても探る野心作である。

『牧神の午後――マラルメを読もう』は、難解なことで知られるステファヌ・マラルメの表題作を丁寧に解読することで、作品精読がもたらす実りを若い読者と分かちあう一冊となっている。

６．書籍

■ 熊倉敬聡、望月良一、長田進、坂倉杏介、岡原正幸、手塚千鶴子、武山政直 編著『黒板とワイン――もう一つの学び場「三田の家」』2011 年 11 月 4 日発行

本書は教育ＧＰの一環である「三田の家」の活動を紹介した書籍。詳細は 28 ページをご覧いただきたい。

「生命の教養学」シリーズ、選書、『黒板とワイン』については慶應義塾大学出版会ウェブページでも書誌情報閲覧が可能である。

■ 慶應義塾大学出版会ウェブページ
http://www.keio-up.co.jp/

（吉田恭子）

2010 年度教養研究センター

刊行物一覧

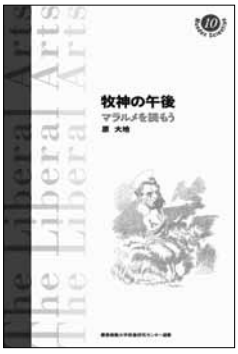
2009 年度活動報告書
（2010.8.16 発行）

Newsletter16 号
（2010.7.15 発行）

Newsletter17 号
（2011.1.15 発行）

教養研究センター選書 8
『身近なレトリックの世界を探る
―ことばからこころへ』
（2011.5.20 発行）

教養研究センター選書 9
『触れ、語れ―浮世絵をめぐる知的冒険』
（2011.5.20 発行）



教養研究センター選書 10
『牧神の午後―マラルメを読もう』
（2011.5.20 発行）

2009 年度極東証券寄附講座
「生命の教養学」講義集
（2011.4.15 発行）

2010 年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
（2011.3.31 発行）

2010 年度庄内セミナー報告書
（2011.3.21 発行）

CLA アーカイブズ 23
（2010.10.29 発行）

CLA アーカイブズ 24
（2011.2.22 発行）

極東証券寄附講座パンフレット
（2011.3.25 発行）

極東証券寄附講座「アカデミック・
スキルズ」プロモーション映像
（2011.3.17 発行）

教養研究センターパンフレット
（2011.3 発行）

プロジェクト――研究関連プロジェクト
文科省大学教育推進プログラム
【テーマ A】（教育 GP）

身体知教育を通して行う教養言語力育成

本センター特定研究として、2008 年度より教育プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」が始まった。これは日本の大学教育では座学の授業と比して参加・体験型教育がまだまだ少ないという認識の下、後者の充実をはかることにより、それを中級レベルの言語力教育と繋げようとするもので、創造力と協働力を備えたリーダーシップ教育を兼ねている。

2009 年度には文科省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラムに採択され、同年 10 月よりその活動が始まった。全体活動の他に、5 つに分かれたセクション――Ⅰ「アート」、Ⅱ「フィールド・アクティヴィティ」、Ⅲ「コミュニティ」、Ⅳ「コミュニケーション」、Ⅴ「発信・評価・システムデザイン」――ごとの活動やセクション間で連携したりセクション間を横断したりする活動が展開された。

さて、2009 年度の活動が 6 カ月間の準備的なもので、関連事業数が 28 だったのに比べて、2010 年度は本プログラムの活動も本格化して、関連事業数は 43 と大幅に増えた。事業のタイプとしては、本プログラムを授業内に組み込むもの、授業外で展開するもの、日吉を初めとする慶應義塾大学キャンパス内で行うもの、大学キャンパスの外に出て、セクションⅡ「フィールド・アクティヴィティ」、セクションⅢ「コミュニティ」の関連で実施するものなど、多岐にわたる。キャンパス内の正規授業において展開されたものとしては、理工学部「総合教育セミナー――洗練された言語力を養う：レトリックとデザイン」（金田一真澄・森泉担当）、教養研究センター「アカデミック・スキルズⅢ、Ⅳ：批評と創作―教養言語力の育成を目指して」（佐藤元状・坂倉杏介担当）、同センター「身体知」（夏期集中講座、武藤浩史・横山千晶・佐藤元状担当）などがあり、同じく実験授業として「エディティング・スキルズ」（笠井裕之・大出敦・吉田恭子担当）などが挙げられる。キャンパス内で、授業を授業外のイベントと繋げたものとしては、文学部「英語Ⅰ」と連動させた「狂言と言語力」（徳永聡子担当）プロジェクトや、文学部「文学」との関連で「日吉国際詩祭」（吉田恭子担当）を開催した事業があった。キャンパス外で展開した授業としては、商学部「総合教育セミナー：地域との対話――取材としてのフィールドワーク」（牛島利明・柏崎千佳子担当）、経済学部「自由研究セミナー」（長田進担当）、文学部「社会学」（岡原正幸担当）などが挙げられる。授業とは別に行ったキャンパス外の地域活動については、本取組のために新たに設立された横浜石川町の拠点「カドベヤ」において始まった身体知クラス「動く教室」をはじめ、本大学キャンパス外拠点「三田の家」、「芝の家」、「カドベヤ」で、多数実施された。

以下、関連事業を列挙する。

1． 4 月～ 7 月　レトリックと身体（週一回）。
理工学部「総合教育セミナー」の授業「洗練された言語力を養う：レトリックとデザイン」（金田一真澄・森泉担当）の中で、言語レトリックの身体性を講義した後、広告文のキャッチコピーとボディコピーを作らせ、教養言語力育成に努めた。

2． 4 月～ 7 月　狂言と言語力（週一回）。
文学部授業「英語Ⅰ」（徳永聡子担当）をプラットフォームとし、セクションⅠ「アート」の活動の一環として古典芸能に親しむ事業を行った。2010 年 7 月 2 日（金）に狂言師大蔵基誠氏を迎えて狂言体験イベント「MOTONARI OHKURA'S THIS IS KYOGEN――言葉×身体×感性」を開催した。英語を履修する学生の間で「狂言と言語力イベント実行委員会」を立ち上げ、広報から舞台運営を学生が行い、そのプロセスをインターネットを通して言語化した。

3． 4 月～ 7 月　社会学のフィールドワーク――映像社会学とフィールドワーク（週一回）
文学部「社会学」（岡原正幸担当）の授業で、5 月 26 日に映像社会学の実践を柱にして現場に入り、その体験の言語的かつ映像的な表現活動を展開した。

4． 4 月～ 1 月　批評と創作――教養言語力の育成を目指して（週一回）
教養研究センター設置講座「アカデミック・スキルズⅢ、Ⅳ」（佐藤元状・坂倉杏介担当）と連携して、ドキュメンタリー・ワークショップを行った。フィールドワークとそれを言語化することとドキュメンタリー映画製作を関連付けて行い、成果発表会を行った。年度末には、創作発表会「アカデミック・スキルズ作品展“来てくれてごめんなさい”」を 2 月 5 日と 7 日の 2 日間にわたって日吉キャ

ンパスの来往舎ギャラリーとイベントテラスで行った。

5． 4月～1月　社会学のフィールドワーク
三田の家とコミュニティデザイン・アクションリサーチ(週一回)
文学部「社会学」(岡原正幸担当)の授業で、三田の家をベースにカフェ、コンサート、展示、撮影、上映をコミュニティの中で企画実践する実験を行った。

6． 4月～1月　社会学のフィールドワーク
――活動／障害・性・生への参与観察(週一回)
5と同じ授業で、ＮＰＯ活動家を招き、障がい者の生活に多面的に関わっていくことの意義を模索した。

7． 4月～1月　地域との対話その1
――取材としてのフィールドワーク(週一回)
商学部総合教育セミナー（牛島利明・柏崎千佳子担当）の通年授業において、日吉キャンパスに近い日吉・元住吉両商店街のフィールドワークを行い、大学と地域の役割を考える方法を模索した。

8． 4月～1月　地域との対話その2
――協働のためのフィールドワーク(週一回)
7と同じく商学部の総合教育セミナー(牛島利明・柏崎千佳子担当）の授業の中でキャンパス近隣地域の障がい者施設と大学キャンパスを結ぶ新しい取り組みを実現するための活動を進め、体験の中での気づきを文献などで学んだ知識と統合して体系的・論理的に言語化することを目指した。

9． 4月～1月　小編成器楽・声楽アンサンブル実践と言語知の獲得(週二回)
週2コマの「音楽」の授業(石井明・佐藤望担当)において、歴史的音楽を体験的に学習することを通して体と頭の双方から音楽と言語力の両方を磨くことを目指した。11月28日（日）「古楽器で奏でるバロック時代のトリオ･ソナタ」、12月21日「慶應義塾コレギウム・ムジクム　オルガンと合唱によるクリスマスコンサート」、2011年1月12日(木)「慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会」を開催した。

10． 4月～1月　身体知を通した文学教育(週一回)
授業「文学」や法学部「人文科学研究会」(武藤浩史担当）において、作品解釈と繋げる形で、身体知ワークショップや創作ワークショップを行った。その成果を「ていねいな身体」と題する詩集にまとめた。

11． 4月～1月　寿物語プロジェクト：みまもり・ききとり・ものがたり(週一回)
法学部「人文科学特論」(武藤浩史・横山千晶担当)において、ＮＰＯ法人と連携して、横浜市寿地区独居老人みまもりプロジェクトに参加し、高齢者との交流を体験した。

12． 4月～3月　動く教室(週一回)
フィールドワークとコミュニティづくりの活動を展開する横浜市石川町の大学拠点「カドベヤ」にて、体と言葉とコミュニティづくりの活動を展開した。身体芸術家の協力を得て、身体ワークショップを通した地域活性化の試みとして、毎週火曜日に「動く教室」を開催した。

13． 4月～3月　実験授業エディティング・スキルズ(週一回)
編集の基本スキルを習得させ、製本体験をして、生協書店で書籍フェアを行い、雑誌『ばら☆ばら』を編集すると同時に、「フランス語ニューズレター」(日吉版と三田版)の編集を行った。

14． 4月～3月「コミュニティ菜園プロジェクト」(月一回)
本学キャンパス外キャンパス「芝の家」の活動として、地域住民、学部学生、卒業生の協働によって、コミュニティの「菜園」をつくる「芝の家コミュニティ菜園プロジェクト」を引き続き展開した。

15． 4月～3月　都市メディアデザインのためのフィールドワークと物語言語の習得法開発(隔月)
「三田の家」を舞台に、様々な“メディア・デザインの仕事の現場”をテーマに、働くことにおいて求められる身体知と言語コミュニケーションの在り方について、ゲスト講師とともに体験型のワークショップを通じて学んだ。

16. 4月中旬　現場に出て、地域振興の問題を考える　その１　日吉を舞台にした町あるき

経済学部「自由研究セミナー」(長田進担当) で、地域振興を考えるゼミナール形式の授業を展開した。

17. 4月中旬　ピアメン参上！　その１「新しく大学生になったそこのキミ！」

日吉メディアセンター（図書館）内に、先輩学生による１，２年生のための学習相談の場を設置し、ピア・メンターとして学習相談を行った。ノートの取り方の具体的なスキル習得のためにノート展示を行った。

18. 5月上旬　現場に出て、地域振興の問題を考える　その２　関東近郊でのまちあるき活動

経済学部「自由研究セミナー」内で、地域振興を考えるゼミナール形式の授業を引き続き展開した。

19. 5月上旬　ピアメン参上！　その２「5月病かな、と思ってるキミ」

学びの場を学生自らが考えていくピアメンターたちが引き続き学期半ばの新入生たちのアドバイザーとなって活動した。

20. 6月中旬　世界の今に目を向けるための映画上映会その４

平成21年度に引き続き、世界のアクチュアルな問題に切り込んでいく先鋭的な映画の上映を行った。第4回目の上映会は「ぼくらはもう帰れない」を6月14日に上映した。藤原敏史監督を招き、ディスカッションを行った。

21. 7月中旬　感動体験ワークショップ　その３「からだを通して言語を読み解こう――『ハムレット』を描いてみる」

平成21年度に引き続き、言語で書かれた文学作品を題材にドラマや芸術的な表現を取り入れながら、身体的な経験を経た解釈へと導いていくワークショップ、古典に親しむ　シリーズ「シェイクスピアを遊ぶ！」の第2回目が開催されました。2010年7月17日と18日の2日間にわたって「『ロミオとジュリエット』と『ハムレット』リミックス」をテーマに、ワークショップを実施した。

22. 8月中旬　身体知――創造的コミュニケーションと言語力(武藤浩史・横山千晶・佐藤元状担当)

文学作品を、解釈から朗読、身体ワークショップ、創作、上演につなげることで、全人的な文学教育を行った。夏季休暇の6日間(8月9日から14日まで）を使って集中的な講義を行った。題材はＤ．Ｈ．ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』を使い、身体を通した解釈を再び言語化することで、芸術言語と学術言語の統合を目指した。

23. 8月中旬　ピアメン参上！　その３「通信教育部夏の陣」

学びの場を学生自らが考えていくピア・メンターたちの活動は夏期試験の前のレポート作成を主眼に行った。また夏期は通信教育部の社会人を中心とした学生が集まるため、そのような学生たちの学習相談の対応をピア・メンターが行った。

24. 8月下旬　現場に出て、地域振興の問題を考える　その３

経済学部「自由研究セミナー」において、岐阜県高山市の実地調査(2泊3日　合宿形式)を取り入れつつ、地域振興を考えるゼミナール形式の授業を展開した。8月22日から24日まで夏季合宿を高山市で行い、地元のフィールドワークを行った。

25. 9月上旬　地域との対話――表現とコミュニケーションのためのボイストレーニングワークショップ

フィールドでのコミュニケーションのために身体的な表現技法が必要だが、ここでは「声」を育てるためのトレーニングを行った。具体的には日吉で2010年9月4日にボイストレーナーの三上雄三氏を講師として「表現とコミュニケーションのためのボイストレーニングワークショップ」を行った。

26. 9月上旬　アートと文学――ワークショップ　Alfred Tennyson “The Lady of Shalott” の創造的解題：英語版創作をめざして

経済学部「自由研究セミナー」(不破有理担当)をプラットフォームとして「アーサー王ワークショップ」として集中型のワークショップシリーズを展開した。これはその1回目に当たり、9月6日から8日にかけて3日間の集中ワークショップを

開催し、アルフレッド・テニスンの「シャロットの女」の創造的解題を朗読や演劇的手法を取り入れながら行った。

27. 9月中旬　9月11日の初年次教育学会にて、「『身体知』の導入――言語と非言語のワークショップ」と題する身体知ワークショップ（横山千晶・武藤浩史担当）を開催した。

28. 9月中旬　非構成グループエンカウンター合宿ワークショップ
ファシリテーターに橋本久仁彦を迎えて、自分の心を見つめるワークショップが、2010年9月12日から16日までの5日間、山梨県の清里において合宿形式で行われた。

29. 9月下旬　9月20日から22日までベルギーにおいて開催された「国際デザイン史学会」で横浜の拠点「カドベヤ」での活動について、“NEW YOKOHAMA, NEW FACE：Kotobuki District and Its New Movement”と題した研究発表を横山千晶が行った。

30. 10月下旬～1月　実験授業「心をひらく・体をひらく――初心者のための瞑想入門」を、10月14日、28日、11月11日、26日、12月9日の5回開催した。玉光神社宮司本山一博氏と長楽寺住職峯岸正典氏を迎えて、呼吸、歩く、食べるなどの日常的な営みを見直す作業を通して自分の内面と向き合う作業を展開した。

31. 10月下旬　自由研究セミナー：アーサー王伝説解題から創作へ――シャロットの女　その1
アーサー王ワークショップシリーズの2回目で、10月27日に舞踏家の笠井叡を招き、「シャロットの女」をテーマにした身体ワークショップを行い、最後に笠井自身も「シャロットの女」をテーマにオイリュトミーを応用した踊りを披露した。

32. 10月下旬　現代詩ワークショップと日吉国際詩祭
文学部「文学（翻訳で読めない翻訳小説）」（吉田恭子担当）と連動させ、言語を横断する実験的文芸を読み、朗読し、演じ、翻訳することを通じて応用言語力教育の可能性を探った。具体的には、「Hiyoshi Poetry Festival 2010」として、2010年10月27日に現代詩朗読ワークショップが、10月29日に内外の詩人を招いた朗読会が開催された。後者ではオープン・マイクの形式で、学生も含め、一般参加者が自由に詩を持ち寄って朗読する機会も持った。

33. 11月上旬　自由研究セミナー：アーサー王伝説解題から創作へ――シャロットの女　その2
11月5日に「シャロットの女――創作のための物語分析」のワークショップを講師にストーリーアーキテクトの小関章ラファエル氏を迎えて行った。

34. 12月中旬「世界の今に目を向けるための映画上映会」その6
12月18日に、「Con-Can ムービーフェスティバル：CORTO-TOKYO 2010受賞作品を見る！＋受賞監督たちと話す!」と題して、世界中から集まったショートフィルム・ムービーフェスティバルでの受賞作と2008年の受賞監督を招いてのティーチ・インを行った。

35. 12月中旬　ピアメン参上！その4「そろそろレポートがやばくなってきたキミたちへ」
学びの場を自ら作ってゆく学生ピアメンターが期末レポートを目前にした1，2年生に対してアドバイスを与えた。

36. 1月上旬　自由研究セミナー：アーサー王伝説解題から創作へ　その4
一連のアーサー王ワークショップを経た「自由研究セミナー」履修者による創作発表会が2011年1月7日に行われた。

37. 1月上旬～3月上旬　古典に親しむワークショップ
日本の伝統芸能を、アーティストを招いて文化的な側面の講義を受けると同時に実際に体験することで文化理解を深めるワークショップを、カドベヤ「動く教室」の中で行った。1月11日、2月22日、3月1日にそれぞれ地唄舞を通して古典芸能に親しむ試みが展開された。

38. 1月中旬　対自・対他ワークショップ

1月14日に「学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿――同質集団の中の孤独」（講師：讃岐真佐子）と題して、学生たちの抱えるコミュニケーション不全の問題をともに考える場とした。

39. 2月初旬　ピアメンター学習相談活動の振り返りと勉強会

図書館のレファランス・カウンターにおいて一年間を通して運営してきた学生ピアメンターによる学習相談の活動を見直す勉強会を2011年2月1日に行った。

40. 3月上旬　感動体験ワークショップ　その4「からだを通して言語を読み解こう――『夏の夜の夢』をうたってみる」

言語で書かれた文学作品を題材にドラマや芸術的な表現を取り入れながら、身体的な経験を経た解釈へと導いていく実験授業のシリーズ「シェイクスピアを遊ぶ!」の3回目。2011年3月6日に「『夏の夜の夢』を歌おう！」と題して、文学部教授井出新、アーティスト中ムラサトコを迎えて前半は学術的な研究に基づくディスカッションを中心に、後半は音楽的なアプローチから五感を使って、シェイクスピアを体験した。

41. 3月上旬　「怒り」と「葛藤」に創造的にむきあうワークショップ

怒りや戸惑いを含めた自分の感情と向き合い、そこから生産的な自己表現やコミュニケーション能力を磨くためのワークショップで、臨床心理士佐藤仁美と異文化コンサルタント山本薫を講師に迎えて2011年3月5日にワークショップを開催した。コラージュを用いて自分との対話を行ったうえで他人とシェアする作業や、アクティブ・リスニングなどを通した対自・対他のコミュニケーションの在り方を探る体験をした。

42. 3月中旬～下旬　シンポジウムと外部評価の実施

本取組の成果をシンポジウムで発表すると同時に外部評価を実施した。具体的には、一つのセクションの報告会と全体取組の中間報告会を開催した。

前者は本学横浜拠点「カドベヤ」の事業報告として、2011年3月25日に、ホームレス自立支援「ビッグ・イシュー基金」の支援を受けて設立されたダンス・グループ「ソケリッサ！」のメンバーをゲストに迎えて、寿プロジェクトシンポジウム「コミュニティダンスの社会的・芸術的可能性――ソケリッサ！の試み、カドベヤの試み」を開催した。当日はカドベヤの立ち上げと活動報告について紹介した後、ソケリッサ！とカドベヤのメンバーがそれぞれのダンスを披露。その後、コミュニティダンスの意義について参加者とともに意見交換を行った。

後者は2009年から2010年の活動を振り返り、外部コメンテイターのアドバイスを受ける場として「文部科学省　大学教育・学生推進事業　大学教育推進プログラム『身体知教育を通して行う教養言語力育成』中間報告会」を2011年3月31日に日吉キャンパスで開催した。全体の振り返りを行った上で5つのセクションの事業報告を行い、国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官の川島啓二氏のコメントをもとに、全体ディスカッションを行った。また、本取組内の「身体・言語・文化デザイン研究会」と「教育評価創造委員会」が合同で2010年10月15日に北里大学小島佐恵氏の協力を得て作成した参加者アンケート、および本プログラム参加教員によって提出された「自己評価・自己目標」アンケートについても紹介・議論された。

43. ホームページの更新による活動の紹介と報告

本取組の内容を、ホームページを通じて積極的に発信した。同時に、各メンバーが自分たちのＨＰを通じてそれぞれの取り組みも発信した。

（武藤浩史）

プロジェクト――研究関連プロジェクト

基盤研究（1）カリキュラム研究

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究

教養研究センターの基盤研究においては、これまで慶應義塾大学で実施されているカリキュラムについて、日吉での教育を中心にしながらさまざまな観点から検討してきた。

2010年度は、本研究の成果をひとつの契機にして2008年度に設置された「学部共通カリキュラム委員会」および「日吉カリキュラム検討委員会」が、本格的な活動を始めたことから、データの提供等で今後の日吉のカリキュラムの充実を側面支援できるような活動に重点をおいてきた。

2010年2月に、これまでに基盤研究に携わってきたメンバーで話し合いを行った結果をふまえ、2010年度に新たな研究会を立ち上げた。基盤研究（カリキュラム研究）が今後目指していくことは、第一に、時代にふさわしい教養教育カリキュラムの研究について、これまでの行った提言の再検証や、問題点の検討、成績評価の考え方の普及、半期制問題、学部横断プログラムの整備などについて、今後も継続して検討を続けていくこと。第二に、学生本意のカリキュラムとは何かということを追求しつつ、日吉共通の横断的副専攻制度への道筋をどのようにして実現していくことができるか、教養研究センターでのカリキュラムの構築・構想や、日吉共通カリキュラム委員会との連携について検討することである。

以上の目的をふまえ、2010年度は、カリキュラムについての教員の意識を知るためのアンケート調査を実施した。5月、7月、12月、1月の4回の研究会、6月、11月、12月の幹事会を開き、アンケート内容とその解析方法について検討を行った。アンケートでは、1）教養教育の目的、2）講義要項・シラバスについて、3）成績評価について、4）クラス編成と学生レベルについて、5）授業運営について、6）授業評価について、7）カリキュラム編成・クラス編成について、8）半期制について、9）自由記述、9つのカテゴリーに分けられ59の質問を設けた。アンケートにおいては、客観的なデータを取ることが可能になるよう注意を払い、教員からのさまざまな提言がくみ上げられることができるような工夫を行った。2011年1月17日の学内理事等懇談会において、長谷山理事が学内各学部長にアンケート調査協力を依頼して、了承された。アンケートの対象は、慶應義塾大学において直接的または間接的に学部学士課程の教養教育や導入教育に携わっている常勤教員607名である。用紙は2月3日に発送し、最終的に204名より回答を得た（回収率30.04％）。

2011年度は、このアンケートの集計・解析を進め、2011年7月にこのアンケート結果の発表と、それに基づいた今後の提言について話し合うシンポジウムを行う予定である。

＜研究メンバー＞
伊藤行雄（経済学部）
木島伸彦（商学部）
木俣章（法学部）
近藤明彦（体育研究所）
坂本光（文学部）
佐々木美帆（商学部）
佐藤望（商学部）
村越貴代美（経済学部）
横山千晶（法学部）
種村和史（商学部）
不破有理（経済学部）
武藤浩史（法学部）
大出敦（法学部）
吉田恭子（文学部）

（佐藤　望）

2010年度　大学カリキュラムに関する教員アンケート

慶應義塾大学教養研究センター

Ⅰ．一般的な事項について
あなたご自身について、それぞれあてはまる番号に○をひとつ付けてください。

問1 所属	1. 文学部　2. 経済学部　3. 法学部　4. 商学部　5. 医学部／薬学部　6. 理工学部　7. 総合政策／環境情報学部／看護医療学部　8. 体育研究所
問2 所属地区	1. 日吉　2. 三田　3. 矢上　4. 湘南藤沢
問3 大学における教育年数（非常勤を含む）	1. 5年未満　2. 5～10年未満　3. 10～20年未満　4. 20～30年未満　5. 30年以上
問4 担当科目	1. 語学科目を主に担当し、加えて総合教育科目（教養科目）を担当している　2. 語学科目を主に担当し、総合教育科目（教養科目）は担当していない　3. 総合教育科目を主に担当している　4. 専門科目を主に担当し、加えて総合教育科目（教養科目）を担当している　5. 専門科目を主に担当し、総合教育科目（教養科目）は担当していない　6. その他
問5 総合教育科目担当経験	1. これまで総合教育科目（教養科目）を担当したことがある　2. これまで総合教育科目（教養科目）を担当したことがない

Ⅱ．教養教育の目的について
問6 大学で身につけて欲しい具体的な教養とはどのようなことですか。（複数回答可）

1. 英語
2. 英語以外の外国語
3. 文化や歴史に関する理解
4. 科学・技術に関する理解
5. パソコンやインターネットが使える能力
6. 情報検索能力
7. 考える力や価値判断力
8. 人間性・人格形成
9. 倫理観
10. リーダーとなる資質
11. コミュニケーション能力
12. その他
具体的に（　　）

問7 大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）

1. 英語はできなくても構わない
2. 日常会話程度
3. 仕事で使える程度
4. プレゼンテーション能力
5. ディスカッション能力
6. 英字新聞の読解力
7. 小説の読解力
8. 論文の読解力
9. 論文を書く力
10. その他
（　　）

問8 大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語以外の外国語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）

1. 英語以外の外国語はできなくても構わない
2. 日常会話程度
3. 仕事で使える程度
4. プレゼンテーション能力
5. ディスカッション能力
6. 英字新聞の読解力
7. 小説の読解力
8. 論文の読解力
9. 論文を書く力
10. その他
（　　）

教員アンケート見本

プロジェクト――研究関連プロジェクト

基盤研究（2）身体知プロジェクト（総括）

1.「身体知プロジェクト」の目標

「身体知プロジェクト」は新たな大学教育カリキュラムの構築と教授法、および成果発信を考える教養研究センターの基盤研究の一つとして2005年度から活動を展開している。このプロジェクトでは既存のカリキュラムを補う身体を通した新たな教育コンテンツを考えることを主眼としている。具体的には理論構築を行い、その理論の教育効果を実践を通して確認し、教育コンテンツとしてカリキュラムの中に反映させていくことを目標としている。

2．2010年の活動内容概観

「身体知プロジェクト」は、座学中心の教育のあり方を補完する教育法をもたらすことを目指して、2005年以来研究会を定期的に開き、また2006年から毎年継続的に実験授業を行ってきた。今までの活動を土台として、2009年度からは特定研究「文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム『身体知教育を通して行う教養言語力育成事業』」の中で個々の活動をさらに展開していくこととなった。同時にこれまでの実験授業の成果が認められ、2010年度からは極東証券寄附講座「身体知」も開講されることとなった（詳しくは該当項目を参照のこと）。

2010年度は上記の特定研究と連携しながら、身体知研究会を開催すると同時に、既存の2つの事業のコンテンツの充実を目指した。一つは「身体知」教育としての音楽の授業のモデル構築、そしてもう一つが「英語ドラマ」クラスで展開されてきた授業内容を教授法として確立していくことである。

3．事業内容と成果

3-1　研究会

理論研究に付け加え、臨床例を幅広く知ると同時に、理論構築を進めていくディスカッション形式の研究会を開催した。今回は特定研究の事業である実験授業「心をひらく　体をひらく～初心者のための瞑想入門～」と連動する形で、開催された。

スケジュールと内容は以下の通り。

第1回　2010年10月8日
「比較行論の視座」
講師：樫尾直樹（文学部　宗教学）
第2回　11月2日
「瞑想を通して探る“もう一つの”文明の可能性」
講師：熊倉敬聡（理工学部）

第3回　11月19日
「瞑想（的）体験を通して身体知を深める学習法の考察」
講師：山本薫（フリーランス異文化コンサルタント）

3-2　既存の言語教育の中での身体の応用と教授法の構築

外国語教育研究センター設置科目「英語ドラマ」をその実践の場として使いつつ、言語学習と身体性の関係をより深く探り、教授法を確立することを目指した。英語のドラマを使ったこの授業はすでに7年目を迎えるが、毎年成果を公演の形で公開している。本年度は題材をノエル・カワード作『陽気な幽霊（*Blithe Spirit*）』とし、文化的な素養も同時に身に着けていけるように工夫した。そのために夏休みの集中合宿（2010年7月28日～29日）を導入することで、テキストだけでない参考文献をも読みこなすリーディングとディスカッション活動を通して、「読み込み」と「解釈」を徹底的に行い、後期のドラマ制作へとつなげていく試みを行った。また、特定研究と連携し、7月4日に横浜のキャンパス外拠点カドベヤにて中ムラサトコ氏と岩橋由莉氏をお迎えし、身体表現ワークショップ「私の哀しみと出逢う」を開催し、ドラマクラスの学生たちが参加した。

公演は2011年2月2日および2月3日の2日間にわたって開催され、多くの観客を集めた。当日の配布パンフレットなどの作成もすべて学生の手によって行った。

3-3　身体知としての音楽教育を考える

教養研究センターでは、日吉音楽学研究室との連携によって、慶應コレギウム・ムジクム演奏会の活動（実技を含む総合教育科目「音楽」の展開）を継続的に展開している。

身体知としての音楽教育は、これまで総合教育科目「音楽」と関連づけるいくつかの事業を展開してきた。2010年度は、特定研究と連携し、旧来の総合教育科目「音楽」に加え、教養研究センターの大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の一環として小編成器楽・声楽アンサンブル実践と言語知の獲得（実験授業の実施）を行った。

本授業では、器楽グループと声楽グループの2グループを編成し、プロの演奏家による指導を得、その共同による成果発表演奏会の開催を行ったことも

注目に値する。

本プロジェクトを通じて、歴史的音楽の体験・実践を通じて、歴史文化の理解とより高度な教養言語力の育成が果たされたのみならず、成果は以下のスケジュールで一般公開された。

■ 慶應義塾大学 HAPP2010 年度新入生歓迎行事
「ショパン・シューマン生誕 200 年記念音楽祭」
第 1 回　大島博テノールリサイタル「ドイツリートの流れをたどって～シューマンへの道～」
2010 年 7 月 3 日 14：00 開演(13：30 開場)
協生館　藤原洋記念ホール

第 2 回　講演会「ショパンとシューマンの時代の音楽」
2010 年 7 月 7 日 17：00
来往舎　シンポジウムスペース

第 3 回　ショパン・マラソン・ピアノコンサート
2010 年 7 月 9 日 17:00
協生館　藤原洋記念ホール

第 4 回　慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会
2010 年 7 月 14 日 18：30 開演(18：00 開場)
協生館　藤原洋記念ホール

■ クラシック・ヨコハマ 2010　大学連携コンサート
古楽器で奏でるバロック時代のトリオ・ソナタ
～教育 GP 実験授業成果発表演奏会～
2010 年 11 月 28 日 14：00 開演(13：30 開場)
来往舎　シンポジウムスペース
(文部科学省　大学教育・学生支援推進事業　大学教育推進プログラム　慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業関連企画)

ハイドンの弦楽四重奏曲
～弦楽四重奏セミナー成果発表演奏会～
2010 年 12 月 19 日 14：00 開演(13：30 開場)
協生館　藤原洋記念ホール

慶應義塾コレギウム・ムジクム「オルガンと合唱によるクリスマスコンサート」
2010 年 12 月 21 日 18：30 開演(18：00 開場)
来往舎　イベントテラス
(文部科学省　大学教育・学生支援推進事業　大学教育推進プログラム　慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業関連企画)

慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会
2011 年 1 月 12 日 18:30 開演(18：00 開場)
協生館　藤原洋記念ホール
(文部科学省　大学教育・学生支援推進事業　大学教育推進プログラム　慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業関連企画)

＜事業メンバー＞
横山千晶(法学部)
不破有理(経済学部)
種村和史(商学部)
武藤浩史(法学部)
熊倉敬聡(理工学部)
石井　明(経済学部)
手塚千鶴子(日本語・日本文化センター)
佐藤　望(商学部)
徳永聡子(文学部)

(横山千晶)

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

身体知プロジェクト

2005年度に発足した「身体知」プロジェクトの数年間にわたる研究会と実験授業の成果を礎として、2010年度には正規授業「身体知――創造的コミュニケーションと言語力」（法学部武藤浩史、横山千晶、佐藤元状担当）が始まった。参加・体験型教育の成果を最大限にあげるために、一週間の間、毎日集まって日に3時間以上の授業を行う集中講座の形を選択した。

芸術言語の精読に基礎を置きつつ、それを朗読、ダンス、創作、感性開発などの芸術・臨床心理学系の体験ワークショップと組み合わせることで、高度な言語力とともに優れた協働力に裏打ちされた創造性を育み、21世紀の新しい教養を体現する人材の育成を試みた。

2010年度は、D・H・ロレンス『チャタレー夫人の恋人』（ちくま文庫）をテキストとして、以下のスケジュールで、授業を実施した。

8月9日
第3限　オリエンテーション（武藤）
第4限　解釈・語り合い（武藤）
8月10日
第3限　ワークショップ（Touch）（武藤）
第4限　ダンス（黒沢美香）
8月11日
第3限（12時30分開始）　朗読（古屋和子）
第4限　講談（神田陽子）
8月12日
第3限（12時30分開始）　朗読（古屋和子）
第4限　ダンス（黒沢美香）
8月13日
第3限　創作（横山・佐藤・武藤）
第4限　創作（横山・佐藤・武藤）
8月14日
第3限　成果発表
第4限　創作発表
第5限　振り返り（武藤）

履修学生は、週前半に行われた身体ワークショップで解放された感性を用いて、週後半に創造力を爆発させ、最終日の発表会は、創作ダンス、演劇、小説から朗読に至るまで、きわめて高いレベルに達した。

履修者からは、「自分を解放できる感じで、毎日授業が終わると、解放感いっぱいです」、「身体を使った参加型の授業は、とても楽しい上に、とてもためになりました」、「このような授業ははじめて受けたが、“頭と体をつなげる”という経験は、刺激的なものだった」など数多くの肯定的なコメントをもらった。授業評価の統計は以下のとおりである。

2010「身体知――創造的コミュニケーションと言語力」授業 履修者アンケート

A統計　2010.08.17

1 「この授業に満足していますか？」

8月○日	不満がある	やや不満	まあ満足	満足している
9	0	0	2	14
10	0	1	1	14
11	0	0	2	6
12	0	0	4	4
13	0	0	5	10
14	0	0	2	13
全体	0	0	2	13

2 「同種の試みにまた参加したいと思いますか？」

8月○日	参加したくない	あまり気が進まない	できれば参加したい	ぜひ参加したい
9	0	1	5	10
10				
11	0	0	5	3
12				
13	0	1	3	11
14				
全体				

3 「参加・体験型の授業を大学教育に積極的に取り入れるのは，教育的または社会的に意義があることだと思いますか？」

8月○日	思わない	あまり思わない	どちらかといえば思う	強く思う
9	0	1	3	12
10				
11	0	0	1	7
12				
13	0	0	3	12
14				
全体				

4 「言語を用いたコミュニケーション力，交渉力，表現力，発信力などが身につきましたか？」

8月○日	思わない	あまり思わない	どちらかといえば思う	強く思う
9	0	0	11	5
10				
11	0	0	5	3
12				
13	0	1	2	12
14				
全体				

（武藤浩史）

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

アカデミック・スキルズ

2005年よりこの名称で開講されている「アカデミック・スキルズ」は大学において学ぶべきもっとも基本的な2つのスキルである論文の書き方とプレゼンテーションの方法を少人数クラスで徹底的に指導することを目的としている。2010年度は、基礎編「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」(通年授業、春学期はⅠ、秋学期はⅡ)を3クラス、中級編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」(通年授業、春学期はⅢ、秋学期はⅣ)を2クラス開講した。以下、各クラスの目的および内容について詳述したい。

「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」の目的は、論文の書き方とプレゼンテーションの方法の基礎をじっくりと習得していく点にある。通常、春学期は論文の書き方の指導に専念し、秋学期からプレゼンテーションの指導を行なうというスケジュールを設定している。それは各自の関心をアカデミックな場に発信するにあたって、論文作成の段階で鍛錬されるリサーチ能力や論理的な思考が基本になるという認識に基づいている。火曜5時限クラス(担当:奥田暁代、迫桂、篠原俊吾、履修者:Ⅰは17名、Ⅱは18名)と水曜5時限クラス(担当:古賀裕章、原大地、不破有理、履修者:Ⅰは13名、Ⅱは11名)は、この伝統的なスケジュールにのっとって授業運営を行なった。論文からプレゼンテーションへという流れの中で、ゆるやかなテーマ(火曜クラスは「身近な世界を掘り下げよう」、水曜クラスは「多様性とは何か」)を掲げ、学生を知的に刺激し、各自の関心を引き出しながら、論文およびプレゼンテーションの作成へと導いた。木曜5時限クラス(担当:赤江雄一、新井和広、佐藤望、履修者:Ⅰは15名、Ⅱは15名)は春学期からディベートを授業に取り入れ、論文からプレゼンテーションへという授業形式を採用した。この形式は早い段階からグループワークを積極的に取り入れることで、クラスとしての結束力を高め、結果的に、学生同士が積極的に助けあう効果をもたらした。

月曜2時限目の「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」(担当:大出敦、識名章喜、津田眞弓、履修者:Ⅲは2名、Ⅳは2名)は原則として「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」の既習者を対象に、論文の書き方とプレゼンテーションの方法をさらに高度なレベルに高めるための指導を行なった。本年度は、通年「外部から見た〈慶應〉像の綜合的研究――『塾生・塾員』はいかに表象されてきたのか?」というテーマで、幅広いジャンルの著作を検討し、学際的な知を養うとともに、テキストの精読の訓練を行ない、独創的かつ先鋭的な論文の執筆に導いた。

さらに、本年度は新たにメディアリテラシーを論ずるクラス「批評と創作――教養言語力の育成を目指して」が月曜5時限目に設置された(担当:坂倉杏介、佐藤元状、履修者:Ⅲは16名、Ⅳは16名)。このクラスでは、批評行為と映像制作を中心に据え、理論と実践、批評と創作をバランス良く学習した。春学期は、映画監督の藤原敏史氏と映画評論家の杉原賢彦氏を講師に迎え、学生主体のドキュメンタリー制作を行い、秋学期は、ヴィデオ・アーティストの小泉明郎氏を講師に迎え、ヴィデオ・アートの制作を行った。春学期は、グループワークの実践を通じて、学生のコミュニケーション力を磨き、秋学期は、個人制作を通じて、学生の自己との対話能力を深めていった。

合計5クラスからなる「アカデミック・スキルズ」の一年の成果は、公開プレゼンテーション・コンペティション(2011年2月7日、来往舎シンポジウムスペース)および「2010年度 アカデミック・スキルズ学生論文集」に結実した。コンペティションでは、塾内外から多くの聴衆を迎え、各クラスの代表、6名が口頭発表を行ない、厳正な審査の結果、金賞2名、銀賞2名、銅賞1名、奨励賞1名が選ばれ、表彰された。また、論文部門では、合計6名の代表者の中から、金賞2名、銀賞2名、銅賞1名、佳作1名が選ばれ、表彰された。また、同コンペティションにおいては、月曜5時限目の「批評と創作」のクラスの学生による映像作品も上映され、多くの視聴者から好意的なコメントをもらった。一年の集大成として毎年学生が主体となって編集している「学生論文集」には、学生論文のほかに、授業の概要、講評、ブックガイドなどが含まれており、充実した内容になっている。

(篠原俊吾)

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

ピア・メンター

教養研究センターは、学生の間の学びの連環を形成すること、学びの場としての図書館の役割を見直し必要な整備をすることを目的に、2008年度からメディアセンターとの共同事業「学生の学習環境を整える」プロジェクト（略称「学び場プロジェクト」）を実施している。本プロジェクトの中心的な活動が、「学習相談アワー」である。これは、教養研究センターの開設科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生の有志が学習相談員（ピア・メンター）として日吉図書館1階のレファレンスデスクに座り、レポートの書き方・文献検索の方法に関する学生からの相談に対応する取り組みである。2010年度は、春学期は5月10日～7月9日、秋学期は10月4日～1月19日（11月18日～24日の三田祭期間と12月23日～1月5日の冬季休業期間を除く）の2期にわたって行われた。原則として、月曜日から金曜日までの13：00から18：00までの時間帯である。

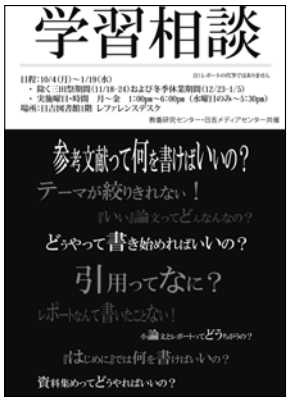
本年度は、学習相談員の大幅な増員および多様化があった。学習相談員は計11名（うち女性2名）、その内訳は修士課程2名（他大学大学院在籍を含む）・学部4年1名・同3年6名・同2年1名・学部卒業生1名であり、所属学部は文・経・法・商にわたる。多様な人材を擁したことで、それぞれの個性や得意分野を生かし相談に対応をすることができるようになった。また、学習相談メモ等を用いて相談内容を共有化し、学習相談員全体の経験として蓄積し、今後のより多様で柔軟な対応につなげることが可能になった。さらに、様々な学年の学生が志願したことは、学習相談員内でのスキルの継承をスムーズに行うことを可能にしたと同時に、アカスキ修了生を中心に、自分たちの学習スキルを他の学生たちに役立てたいと希望する学生が恒常的に存在することを意味し、今後の学習相談アワーの持続的な活動を保証するものと言うことができる。

学習相談員は、通常の相談業務の合間に様々な活動を行っている。大別すると学習相談アワーをよりスムーズに進めるための種々の資料作成と、学習相談アワー以外の機会に学びに役立つスキルを公開する取り組みである。後者に関しては、今年度はノート展示企画「慶應生のノートは美しいのか」が開催された。これは、学習相談員が実際の授業ノート計6点を5つのタイプに分け、ノートテイキングとして優れているポイントをわかりやすく解説しながら展示するという企画で、6月14日から7月9日にかけて、日吉図書館1階メインカウンター前の展示ケースにおいて行われた。図書館を訪れた学生の多くが足を止め展示に見入っており、ノートテイキングに対する学生の関心の高さが窺われた。今後も、学習相談員自身の企画により、よりよい学びの提案を様々な形で実施していく計画である。

このような豊かな成果を上げた今年の活動であるが、学習相談件数の伸び悩み（春学期120件・秋学期52件）という課題も浮き彫りになった。これは本活動の認知度の低さ・実施期間・時間などの制約という理由もあるが、その他に多くの学生が自分たちの学習の成果をよりよいレポートにまとめ上げることの意義を認識していないということも挙げられよう。学習相談アワーのさらなる広報活動の展開とともに、学生に対してより充実した学びへの欲求を喚起するための、啓蒙活動を行っていくことが重要であろう。

（種村和史）

学生相談アワー（春学期）



学生相談アワー（秋学期）

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

生命の教養学

極東証券寄附講座「生命の教養学」は、2010年度に、二つの活動を行った。1)教養研究センター設置の授業の開講、2）2009年度の講義をまとめた書物の刊行、である。

1）授業については、これまでの10人程度の講師によるオムニバス形式にかわる、新しい形式で行った。文系から一人、理系から一人、合計二人の研究者による対話形式である。文系からは「妖怪学」で著名な文化人類学者の小松和彦（国際日本文化研究センター）、理系からは受精卵の形態形成の研究の第一人者で『ヒトの変異』の訳書もある上野直人（基礎生物学研究所）にお願いした。この二人にお願いしたのは、「普通と形が異なるもの」という現象について、文系と理系の研究から違った視点を出すことで、「対話」を成立させようという狙いを持っていた。「生命の教養学」では、おそらくはじめてのことだと思うが、両講師の打ち合わせを行って、それぞれの講義の大枠と、重なり合う話題を設定して、実際の講義に臨んだ。

小松の講義は、2010年の5月8日に、1時限から5時限にわたって行われた。構造主義文化人類学の基本的な概念装置の説明のあと、妖怪や異形、あるいは異界からこの社会に来往したものたちが、どう捉えられるのかということについての講義があった。学生からのエッセイに基づく議論の場では、「異人を差別するのはいけないということを書く人が多かったけれども、『私は異人です』と書いてきた学生はいなかった」という、義塾の学生の本質をつくようなコメントをいただいた。

上野の講義は、その一週間後の5月15日に、同じように1時限から5時限にわたって開講した。ヴィジュアルを多用し、問題のありかをわかりやすく説明した、形態形成についての説明のあと、映画『フリークス』の上映も交えて、人間の異形についての生物学らしい客観的な説明が行われた。上野の講義の一週間後の5月22日に、鈴木晃仁(経済学部)、鈴木忠(医学部)、宇沢美子(文学部)が、合計で3コマの講義を行い、小松・上野両講師の講義内容を、それぞれの関心に沿って発展させた。

この新しい形式での授業は、これまでの「生命の教養学」が持っていた、万華鏡のような知の世界の魅力を伝えるというメリットを失ったかわりに、文系学問と理系学問とが、ある問題についてのインテンスな対話を行う知的なスリルを教室で作り出すことには成功した。その得失あわせて、新しい形式をどのように評価しうるのかということを、コーディネイターを中心にして議論していくべきであろう。

2）慶應義塾大学出版会より、2009年度に行った講義をまとめた、『「ゆとり」と生命をめぐって――生命の教養学 VI』が刊行された。内容は以下のとおりである。

鈴木晃仁(慶應義塾大学経済学部教授)
ゆとりをめぐって

長谷川眞理子(総合研究大学院大学先導科学研究科教授)
ゆとりの進化生物学的基盤Ⅰ――人類進化史から
ゆとりの進化生物学的基盤Ⅱ――ゆとり・遊び・無駄の神経機構から

鈴木　款(静岡大学創造科学技術大学院教授)
見えない自然の循環が生命を支える――サンゴ礁からのメッセージ

日高敏隆（京都大学名誉教授）・幸島司郎（京都大学野生動物研究センター教授）
動物行動学とは何か？――ゆとりと自由な学問

坂根厳夫(情報科学芸術大学院大学名誉学長)
「遊び」比較文化論的考察について――“遊び”や境界領域に永年関わってきた個人史的回想から
情報化時代の芸術・文化にみる意識の深化と拡張について

西成活裕(東京大学先端科学技術研究センター教授)
様々な渋滞とストレス
ゆとりと無駄について

髙山　緑(慶應義塾大学理工学部准教授)
しなやかに生涯発達するひとのちから

前野隆司（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授)
ヒトとロボットの身体・脳とゆとり

（鈴木晃仁）

小松先生講義の様子

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

サイエンス・カフェ

飲み物を片手に、気軽なスタイルでサイエンス談義に混じることのできるカフェ。日吉キャンパス来往舎の「サイエンス・カフェ」は、極東証券寄附講座「生命の教養学」の公開講座という位置づけで2007年初夏に開店してから、およそ2～3ヶ月に1度のペースで着実に開催されている。当初からこちらが期待した通り、子供のお客様もかなり多く、大学の講義などではなかなか見られないような大変活発な質疑応答がある。このカフェで話題提供をする話し手にとっては、子供にもわかるような話し方を工夫する良い機会ともなるし、また、思いもかけない質問を受ける貴重な体験の場となっている。相互に良い刺激を与えつつ、これからも続いていくことだろう。このカフェの活動によって、大学で行われている研究活動が少しでも社会に還元され、特に次代を担う若い伸びやかな頭脳にとって良い時間空間となることを期待している。

「通りがかりにちょっと寄ってみたいカフェ」であることを目指し、第10回までは事前申し込み不要としていたが、準備の都合上、第11回からはなるべく事前の連絡をお願いすることになり、その後、参加希望者がどんどん増加したため、ついに第14回からは定員を明示することになった。このように参加受付に関しては開店当初の気軽さがやや失われたが、それでも相変わらずカフェが繁盛していることを喜びたい。

以下に2010年度に開催された第18～21回のタイトル、講師、ポスターの宣伝文、参加人数を列記する。

第18回　田んぼのエビ――魚屋に並ばないエビ
2010年6月12日　三本博之（商学部・生物学）
「美味しくない。経済的価値が無い。でも…よく見ると面白い！」
参加人数：29名

第19回　宇宙飛行士の見えない命綱――宇宙滞在期間を決める宇宙放射線被曝
2010年10月2日　寺沢和洋（医学部・物理学）
「宇宙飛行士にとっての３つの脅威？
微小重力・閉鎖空間・宇宙放射線被曝測定器の実演あり！」
参加人数：33名

第20回　ミクロのガラス細工――珪藻が地球を救う！？
2010年11月13日　豊田健介（商学部・生物学）
「珪藻を知っていますか？　ガラスの美しく、かつ微細な細胞を持つ植物です。水があるところならたいていどこにでもいます。北極の氷の中・深海・80℃の温泉の中にも！　地球上、最大級の植物群を一緒に観察してみませんか？」
参加人数：26名

第21回　プラナリア――性と死をみつめて
2011年2月5日　松本　緑（理工学部・生命情報）
「小さく切っても再生することで有名なプラナリア。じつは分裂して殖えたり（無性生殖）、つがいが産卵して殖えたり（有性生殖）、季節などによって無性・有性の殖え方を切り換えることもできます。「性」とは生き物の多様性を産み出すしくみ。どうやって殖え方を切り換えているのか？　実際にプラナリアを観察しながら、性と生の不思議に触れてみませんか？」
参加人数：41名

（鈴木　忠）

第18回サイエンス・カフェの様子。
新緑に囲まれたイベントテラスにて

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

教員のためのサポート

【総括】

大学教育を取り巻く環境の激変に対応するための知識とスキルの習得が近年教員に求められるようになっている。このような状況に対応するためのノウハウと設備が慶應義塾の様々な部署、人材の中に様々な形で蓄積されていながら、情報の共有が不足しているために個々の教員たちに充分に生かされていないのが現状である。このような状況に鑑み、研究教育に資する様々な知識とスキルを紹介し、情報共有をはかるために、教養研究センターでは、随時「教員サポートワークショップ」を開催している。

本年度は、メディアセンターとの共催で「メディアリテラシーワークショップ」、学生相談室との共催で「学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿――同質集団の中の孤独」の二つのワークショップが開催された。

6月4日に開催された「メディアリテラシーワークショップ」(講師:和田幸一氏)は、二部構成である。第1部「KOSMOSの新機能と使い方」では、メディアセンターの蔵書検索システムKOSMOSがリニューアルし、My Libraryで図書の予約・更新、取り寄せや申し込みなどが可能になったなど新機能が付加されたこと、画面が変わったことによってとまどいを覚えるユーザーもいることに対応するため、KOSMOSの新機能と使い方が説明された。第2部「図書館資料の利用と著作権」では、図書館資料を授業に利用する際の著作権の扱いに悩む教員が多いことから、図書館資料を利用する際の著作権に関する考え方が説明された。

1月14日に開催された「学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿――同質集団の中の孤独」(講師:讃岐真佐子氏)では、日吉学生相談室カウンセラーとして日頃学生と接する立場から、昨今の慶應義塾生に感じる変化が紹介された。友人と「群れ」ていなければ安心できない男子学生、親との距離が近すぎる男子学生、家庭の精神的な苦しさを肩代わりし疲弊する女子学生など、豊富な例に基づき慶應義塾大学生の実態が報告された。

(種村和史)

【学生相談室より】

1. 活動の趣旨ならびに目的

近年、発達障害もしくはそれに類すると思しき学生の数は確実に増加している。教育現場に立つ我々にとって、気力や理解力が欠けているかに映るこうした学生とどう向き合うかは大きな問題であるが、その一方で、教育機関は社会的要請として彼らを支援する責務を負っている。こうした状況から、教養研究センターでは07年度に萩原豪人(学生相談室カウンセラー)、08年度に佐藤暁美(日吉学生相談室アソシエート・カウンセラー)、09年度に菊住彰(学生相談室カウンセラー)の各氏に昨今の学生が抱える諸問題についてご講演いただいた。4回目となる今回は讃岐真佐子(学生相談室カウンセラー)氏による講演で、詳細は以下の通りである。

2. 活動内容

講演会『学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿――同質集団の中の孤独』
日時:2011年1月14日　18:30～20:00
場所:日吉キャンパス来往舎2階　大会議室
講師:讃岐真佐子(日吉学生相談室 カウンセラー)
司会:鈴村直樹(経済学部)

まず第1部では各種調査や報道に映し出される現代の若年層の傾向(いわゆる「草食化」や「すべてが自己責任というスタンス」など)が指摘され、第2部ではその顕著な発現例として自分のありかたを言語化できず、きわめて漠然と生きているかのような印象を与える少女が取り上げられた。第3部は講演の中心ともいえる箇所で、実際のカウンセリング現場から「数人の男子学生」のエピソードが紹介された。彼らは、例えば人間関係をうまく築くことができない学生、自らの状況を言語化できない学生、あるいは集団内で孤立感や疎外感に苛まれる学生などである。これと対照的に第4部では、家庭の事情に疲弊してしまう「女子学生」の姿が報告された。祖母の介護のため大学を辞めるしかないと考える学生や、母親の老後の面倒をみるよう無理強いされる学生などである。そして、第5部はまとめである。講演は概ね60分間で、引き続き質疑応答が行われた。とりわけ、言語化に伴う諸問題とその解決法、若者が抱える問題の男女差などを中心に活発な議論が行われた。

(鈴村直樹)

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

エディティング・スキルズ

エディティング・スキルズは「本づくり」の企画、取材、執筆、造本、さらに流通にいたる行程を体験的に学び、編集にかかわる総合的な言語力を養うことを目的とするプロジェクトである。

実験授業は年度を通じてほぼ週1回のペースでおこなわれた。春学期のテーマはDTP（Desktop Publishing）と「手づくり本」。DTPが現代の本づくりに欠かせぬものである以上、コンピュータ上の組版を学ぶことはもちろん必修である。しかし担当者たちは、本という古典的メディアの豊かな可能性を知る出発点として、学生たちに「原始的な」本の手触りも体験してほしいと考えた。そこでDTPの授業と並行して専門家による製本教室を開き、1人1冊の「手づくり本」の制作をおこなった。

秋学期は、春学期に学んだ知識と技術を活かして、実際にさまざまな刊行物の編集に取り組んだ（2010年度の活動の集大成と位置づけた学生の手になるキャンパス雑誌は、3月の震災の影響を受け、残念ながら印刷を次年度に持ち越さざるをえなかった）。また本づくりの過程の最後まで、つまり本を読者の手に届けるところまで体験することを目的として、日吉の生協書籍部でブックフェアを企画した。テーマと本の選択だけでなく、展示本にかける帯や推薦文つきのPOPを手づくりするなど、売場のディスプレイにも工夫をこらした。

意欲的な学生たちの参加を得て、活動は多岐にわたったが、その一方で、最終年度に向けてさらなる課題も見えてきた。(1)まず、DTPのスキルをさらに向上させる必要があること。出版物として最低限の体裁を整えるだけでなく、学生独自のアイディアやセンスを具体化するには、まだまだ技術的な蓄積が不足している。(2)それと同時に、編集をおこなう者として、素材となる原稿をチェックする批判的な目を養うべきであること。文章の内容そのものにせよ、日本語の文章技法にせよ、文字通り「言語力」を向上させる地道なプログラムを用意する必要がある。(3) 2010年度の活動では、いま注目をあつめる電子書籍のテーマを掘り下げることができなかった。このあらたな「本」の形がもつ可能性と問題点を学生たちとともに検証した上で、最終年度には紙媒体だけでなく、電子媒体による発信の可能性も試したいと考えている。

以下は2010年度の主な活動の記録である。

- ■ 受講説明会（5月）
- ■ 担当者たちによる「本」をテーマとしたレクチャーとDTP講座（6月）
- ■ 豆本作家・田中栞氏による製本教室（7月）
- ■ 教育GP企画Hiyoshi Poetry Festivalに際して詩人フォレスト・ガンダーの対訳詩集を編集（10月）
- ■ 日吉図書館で小展示「手づくり本の世界」を開催（12月）
- ■ 日吉生協書籍売場でブックフェア「恋愛×○○（レンアイカケル）」を開催（1月）
- ■ 法学部フランス語ニューズレターを編集（2月～3月）
- ■ キャンパス雑誌『ばら☆ばら』を編集（2月～3月）

○エディティング・スキルズのWebサイト：editingskills.net

＜担当者＞
笠井裕之（法学部）
大出敦（法学部）
吉田恭子（文学部）
小磯勝人（慶應義塾大学出版会）

（笠井裕之）

田中栞氏による製本教室

ブックフェア「恋愛×○○（レンアイカケル）」

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

庄内セミナー

教養研究センター主催・東北公益文科大学共催による庄内セミナーを開催した。セミナーは8月31日から9月3日までの公益大酒田キャンパスを基地とした庄内での合宿セミナーと11月13日日吉での報告会から構成された(参加者は慶應18名、公益大6名、慶應卒業生1名)。学生たちは両校交じり合って4つのグループに分かれ、慶應（経済）卒業生の西村崇君が全体の統率役を務めながら、グループワークを行った。

「芭蕉が見た庄内の生命(いのち)」をテーマに、松尾芭蕉の『おくのほそ道』に描かれた庄内についてさまざまな角度から体験的に学んだ。俳諧の世界については俳人で俳句結社「海程」同人の柳生正名氏、『おくのほそ道』から読み取れる庄内の多彩な相貌については、芭蕉をはじめとして江戸の旅のあり方に詳しい作家の金森敦子氏に講演･講義していただいた。一般公開した講演では、セミナーの連続性を保証する意味も考慮して、昨年度取り上げた徂徠学について福澤諭吉との関係を軸とした講演を経済学部長の小室正紀氏にもお話いただいた。合宿では芭蕉の足跡を辿って象潟まで足をのばした。途中、三崎公園では芭蕉が歩いた旧道を歩み、象潟郷土資料館では斎藤一樹学芸員の案内のもと、芭蕉当時の象潟を描いた貴重な象潟図屏風のオリジナルを見学した。クライマックスは、蚶満寺と象潟九十九島―芭蕉が見た風景を体に染みこませた。また、山伏の案内による羽黒山登山、出羽三山博物館見学、そして、酒田市内でのフィールドワークなどを行い、3日にはグループごとの中間報告を行った。

その後、グループごとに連絡を取り合いながら、最終報告を目指したグループワークを継続し、11月13日の報告会では3グループが地域の活性化という観点から酒田市の未来構想、歴史を踏まえた最上川の将来的な利用策、新種米「つや姫」の知名度向上に関する方策提言、1グループが豪商本間家中興の祖・光久の再評価を行った。また、OBの西村君が単独で行った、芭蕉の「不易流行」と酒田商法を結び付けたプレゼンも大きな反響を呼んだ。コメンテーターとして参加された柳生氏、金森氏、小室氏のほか白迎玖氏(東北公益文科大学)、高橋幸吉氏(商学部）からは厳しくも好意的なコメントをいただいた。お忙しい中をご挨拶いただいた酒田市副市長・本間正巳氏をはじめとして、酒田市、鶴岡市などご協力いただいた関係者の皆様、取材していただいた荘内日報、山形新聞の方々には大変にお世話になった。

なお関連企画では、地元から伝承の会の方をお招きして、酒田に伝わる鵜渡川原人形の展示・講演・ワークショップを開催した。また、庄内観光コンベンション協会、大学生協のご協力で庄内フェアを開催、庄内米おにぎり、いも煮、ご当地スナックの販売、庄内に関わる書籍類の展示・紹介も行った。企画にご協力いただいた方々にもあらためて感謝申し上げたい。(URL：http://keio-up.net/shseminar/)

（羽田　功）

基調講演

講義

鵜渡川原人形展示・ワークショップ

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

三田の家

「三田の家」プロジェクトは、慶應義塾大学の教員と学生有志や卒業生などが三田商店街振興組合と共同で運営し、三田の地域社会に新たな文化・交流の萌芽をもたらそうと2006年度より活動してきたプロジェクトである。2010年度主に参加した教員メンバーは以下の通り。岡原正幸(文学部)、熊倉敬聡(理工学部)、坂倉杏介(グローバルセキュリティ研究所)、武山政直(経済学部)、手塚千鶴子(日本語日本文化教育センター)、塩原良和(法学部)、日向清人(外国語教育センター)。本プロジェクトは、長期的には、慶應義塾と港区の共同事業である「芝の家」プロジェクトとも連携しつつ、大学と地域の協同による21世紀的学生街の創出を目指す。また、本プロジェクトは、創立150年記念未来先導基金の助成を受ける事業でもある。

2010年度の活動としては、主に以下のことを行った(なお、具体的な活動内容は、いたって多岐に渡るため、以下の三田の家のサイトを参照)。

1)通常の教室・キャンパスでは実現しがたい実験的授業・ワークショップの企画・実施。2)外国人留学生と日本人学生との「小さな国際交流」プログラムの企画・実施。3)三田商店街ならびに地域住民との共同企画の実施。4)学生が主体となって企画する講演会、展覧会、コンサート、情報発信イベントなどの実施。5)「芝の家」との共同企画の実施。6)三田の家の活動と思想をまとめた『黒板とワイン――もう一つの学び場「三田の家」』(慶應義塾大学出版会)の出版。

なお、年度末に、三田の家の5年近くに渡る活動を客観的に評価するために企画していた「三田の家の今までそしてこれからを考える会」、そして国内で興味深い大学地域連携活動をしている関係者を招き開催する予定だった「大学地域連携の場づくり会議」は、東日本大震災の影響によりやむなく延期せざるを得なかった(2011年度に開催予定)。

(三田の家 URL: http://mita.inter-c.org/)

(熊倉敬聡)

『黒板とワイン』表紙(帯付き)

『黒板とワイン』表紙(帯なし)

三田の家外観

カドベヤ

人と「コト」が出会う場所

2010年4月4日に横浜市中区と南区のちょうど境にオープンした「カドベヤ」。道と道が出会う場所に立っているこの拠点は、近くの寿地区や石川町五丁目界隈に住む人々や働いている人々が自由に出入りして、いろいろな人に出会い、新しい「コト」を起こしていく場所として、慶應義塾大学とコトラボ合同会社が協働で運営するオルタナティブ・スペースである。カドベヤは慶應義塾大学の授業で使われる以外に、コトラボ合同会社とともにさまざまな町づくりや就労支援の企画（「石川町裏っかわ市」や「朝市」）に学生が参加し、町と人の在り方について体験から学ぶ場所として機能している。

また2010年6月15日から毎週火曜日（2011年1月より第1～第3火曜日）に開催されている文部科学省教育ＧＰ事業「動く教室」では、アーティストの協力を得て、動くことを通して言葉とからだと心をつなぐ様々な活動を展開し、地元に住む人々や学生たちの新しい「居場所」を提供してきた。2011年3月25日はこの1年間の「カドベヤ」の活動を振り返るために、ホームレス経験者で組織されているダンスグループ、「新人Ｈ　ソケリッサ!」をお迎えし、シンポジウム「コミュニティダンスの社会的・芸術的可能性～ソケリッサ！ の試み、カドベヤの試み」を開催した。ここでは町づくりやコミュニティ・ダンスの在り方について発表と意見交換が行われただけではない。「新人Ｈ　ソケリッサ！」の力強いパフォーマンスを堪能した後、参加者全員で、「動く教室」の中で生まれたコミュニティ・ダンス「んだんだレゲエ」（作詞・作曲：法学部　武藤浩史）を踊り、東日本大震災の後の人のつながりと想像力の力、および大学が外に出て社会との交流を促す牽引力となることの重要性を確認した。今後は身体的な活動を含む様々な創造力で町を活性化する方法を、学生が主体となって考えていく場としてカドベヤの意義が深まっていくだろう。

（横山千晶）

カドベヤの玄関

「動く教室」和の動き

「動く教室」大人も子供も一緒になって…

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

日吉行事企画委員会（HAPP）

【プロジェクトの内容と目標】

日吉行事企画委員会（HAPP）は、春の新入生歓迎行事、秋の公募企画行事の二本柱によって、2010年度も運営した。新入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行っている。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画をHAPPが主催するものである。新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終えている。この際、様々な行事の主催者として、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの2点に常に留意している。2010年度で特に反響を呼んだのは、春の新入生歓迎行事では「閃光のスフィア――レクイエム」である。この行事では、直前になくなった大野一雄先生を追悼し、急遽、副題をレクイエムとした。大野先生は、この新入生歓迎行事のルーツである舞踏公演に7年にわたってご出演いただいた日吉行事企画委員会にとっての恩人である。秋の公募行事では、理工学部のホルヘ・アルマザン助教によって行われた建築パフォーマンスが専門雑誌でも大きく取り上げられた。学問的な展示が一般的なパフォーマンスとしても成り立ちうることを証明した行事である。また、10月には、横浜市でのAPEC開催にあたり、啓蒙・広報行事に協力した。

【現在の目標達成度】

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議（6月、12月、1月）を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で頻繁に打ち合わせを行っている。特に2010年度は、委員長と委員の任期終了にあたり10月にも全体会議を行った。今後、年4回の全体会議を定例化したいと考えている。

（小菅隼人）

NO.	企画名	概要	日程
1	環境週間	パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し環境問題への関心を喚起する。	6月
2	日吉・ピアノフェスティバルーショパン、シューマン生誕200年記念企画	ショパンとシューマンを中心としたコンサートシリーズ。	6月～7月の2週間
3	塾長と日吉の森を歩こう	塾長と学生がともに日吉の森を散策。	5月
4	細江英公、写真と舞踏を語る	細江英公と土方巽の関わりを映画と写真上映と講演によってひも解く。	5月
5	閃光のスフィア――レクイエム	吉増剛造と笠井叡のコラボレーション。	6月
6	「ドイツ平和村」と「モナリザを描く」に関する展示	展示とワークショップ。	6月
7	「あなたの悩みに効く1冊」を本のソムリエが紹介します！	清水克衛氏による講演と参加者の悩みに応じた本を清水氏がその場で選んで紹介する。	5月
8	銀河鉄道の夜	宮沢賢治原作の舞台「銀河鉄道の夜」を上演する。	10月
9	KEIOフットサルアドベン	フットサル、ブラインドサッカーを通じた、学生や地域住民の交流。	10月
10	Diverta!!3 -Tastiera-	ジャグリング・マジックを中心とした新しいタイプのステージパフォーマンス。	10月
11	Hiyoshi Poetry Festival 2010朗読会	日・仏・英の言語横断的詩の朗読会と現代詩朗読のワークショップを開催。	10月
12	City Sonar	日常に溢れる「電波」を目、耳、感覚で「感じる」ための作品。	10月～11月
13	建築パーフォーマンス	パビリオンを作ることによって、建築のパーフォーマンス力を生かすプロジェクト。	10月
14	Exodus gallery 2010	21世紀の文化のあり方を考える、学生主体のアート集団による個展。	12月
15	APECフェスタ2010 in 慶應	横浜市で開催のAPEC首脳会議（2010年11月7日～14日）を学生と市民に告知することを目的とする。	10月

NO.1~7:：新入生歓迎行事，NO. 8~14：公募企画行事（企画決定順），NO.15：特別企画

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

日吉キャンパス公開講座運営委員会

日吉キャンパス公開講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスを中心として、慶應義塾が持つ知的リソースを地域社会に広く公開し還元することを主たる目標としている。2010 年度開講分の詳細は以下の通りである。

【春期講座】

大学での能動的な「学び」の体験を、地域住民を始めとする学外の方々に体験していただくべく、以下のような参加型の少人数セミナー講座を開講した。定員は講座ごとに各 20 名、受講料は 12,000 円とした。前年度の成果を踏まえ、当年度も受講者の年齢分布に幅を与えて刺激とすべく、日吉キャンパス所属の学部生に限り、各講座 5 名を上限として無料での受講を認めた。

講座 1　実験で学ぶ気象の教室

講師：杉本憲彦（法学部）

開講日：5 月 22 日、29 日、6 月 5 日、12 日（10：00 ～ 12：00）

講座 2　宇宙エアロビクスから学ぶ人体歪み矯正のヒント

講師：狼嘉彰（システムデザイン・マネジメント研究科）、嘉陽宗弘（システムデザイン・マネジメント研究科博士課程、ブリティッシュコロンビア大学客員研究員）

開講日：5 月 22 日、6 月 5 日（13:00 ～ 16:45）

講座 3：理系・文系・ダンス系 ── 生きること、学ぶこと、動くこと

講師：前野隆司（システムデザイン・マネジメント研究科）、武藤浩史（法学部）、黒沢美香（ダンサー）

開講日：6 月 5 日、12 日、19 日（13:00 ～ 16:00）

講座 4：体と頭でハムレット ── 演劇と映画

講師：横山千晶（法学部）、佐藤元状（法学部）、松井周（劇団サンプル主宰）

開講日：6 月 12 日、19 日、26 日（13:00 ～ 16:45）

講座 5：バッハ～深遠なる魂の響き～を聴く

講師：佐藤望（商学部）

開講日：6 月 19 日、7 月 3 日（13:00 ～ 18:00）

「細江英公、写真と舞踏を語る」ポスター

「建築パフォーマンス」ポスター

【秋期講座】「読むことの過去と未来」

現在、インターネット上での文字を中心としたコミュニケーションの急激な拡大、電子書籍の普及に伴い、人々が慣れ親しんできた「読む」という営為は、大きくその姿を変えつつある。その変化をより良く理解するための一助とすべく、当講座では「読むことの過去と未来」という講座テーマを設定し、講義形式によるオムニバス講座を開講した。広範な領域より講師を招いた各回の詳細は、以下の一覧の通りである。土曜開講、各回 90 分× 2 コマ、全 10 回、受講申込は全 10 回セット（受講料 8,000 円）とした。定員 300 に対し受講者数 291 名（うち通信教育課程を含む塾生 10 名）、修了者数（6 回以上出席にて修了証を授与）239 名（82.1%）、全回出席者数 61 名（20.9%）、平均年齢は 62 歳（最高齢 86 歳、最年少 18 歳）であった。

講座 1　9 月 25 日

3 限　哲学と文字
　　講師：納富信留（文学部）
4 限　シリトーからリチャードソンへ
　　――『長距離走者の孤独』の<孤独>について
　講師：佐藤元状（法学部）

講座 2　10 月 2 日

3 限　『チャタレー夫人の恋人』――精読と身体知
講師：武藤浩史（法学部）
4 限　狂言を通してシェイクスピアを読む
　　――古典への新たなアプローチ
講師：河合祥一郎（東京大学大学院総合文化研究科）

講座 3　10 月 9 日

3 限　中国古典詩を読み解く――漢字と典故と韻律の迷宮
　　講師：高橋幸吉（商学部）
4 限　女性が読む、ということ
　　講師：小谷真理（SF& ファンタジー評論家）

講座 4　10 月 16 日

3 限　ゲーテの孫に感謝――文豪の作品を護る人々
　　講師：石原あえか（商学部）
4 限　文学――プロの表現と読み方
　　講師：加藤宗哉（『三田文学』編集長）

講座 5　10 月 30 日

3 限　戦争を語る――第一次世界大戦と現代のイギリス女性作家
　　講師：河内恵子（文学部）
4 限　文学トカトントン――太宰治は「モラリスト」か
　　講師：荻野安奈（作家、文学部）

講座 6　11 月 6 日

3 限　未来の本の作り方――出版の現在から電子書籍まで
　　講師：前野隆司（システムデザイン・マジメント研究科）、堀田純司（作家、編集者）
4 限　読書とユニバーサル・デザイン
　　――書籍のバリアフリー化からのアプローチ
　　講師：中野泰志（経済学部）

講座 7　11 月 13 日

3 限　昔の本はこうだった――写本から印刷本へ
　　講師：髙宮利行（名誉教授）
4 限　女性がものを書くこと
　　――アメリカ女性歴史家ハナ・アダムス
講師：大串尚代（文学部）

講座 8　11 月 27 日

3 限　ネット帝国主義が文化に及ぼす影響
　　講師：岸博幸（メディアデザイン研究科）
4 限　アフリカ系アメリカ文学とは
　　――領域の展開と限界
　　講師：奥田暁代（法学部）

講座 9　12 月 4 日

3 限　江戸の絵本「草双紙」の世界――絵と文で綴る物語
　　講師：津田眞弓（経済学部）
4 限　インテリジェンス感覚を磨くために
　　――現代社会をどう読み解くか
　　講師：手嶋龍一（外交ジャーナリスト、作家、大学院システムデザイン・マネジメント研究科）

講座 10　12 月 11 日

3 限　平安時代の読書
　　講師：佐藤道生（文学部）
4 限　読むこと、書くこと、語ること
　　――声から見た中世ヨーロッパ
　　講師：岩波敦子（理工学部）

（坂本　光）

運営委員会委員

2010年4月1日～2011年3月31日在籍者
第5期(2009年10月1日～2011年9月30日)

教養研究センター担当常任理事
長谷山　彰
教養研究センター所長　横山　千晶(2010年9月まで)
不破　有理(2010年10月から)

教養研究センター副所長
不破　有理(2010年9月まで)
武藤　浩史(2010年9月まで)
種村　和史
吉田　恭子(2010年10月から)
大出　敦(2010年10月から)
教養研究センター事務長
柴田　浩平
文学部長　中川　純男(2010年4月14日まで)
関根　謙(2010年4月15日から)
経済学部長　小室　正紀
法学部長　国分　良成
商学部長　樋口　美雄
医学部長　末松　誠
理工学長　青山藤詞郎
総合政策学部長　國領　二郎
環境情報学部長　村井　純
看護医療学部長　太田喜久子
薬学部長　増野　匡彦
文学部日吉主任　関根　謙(2010年4月20日まで)
斎藤　太郎(2010年4月21日から)
経済学部日吉主任　比留川　彰
法学部日吉主任　武藤　浩史
商学部日吉主任　成田　和信
医学部日吉主任　長井　孝紀
理工学部日吉主任　金田一真澄
薬学部日吉主任　江原　吉博
特定研究(教育ＧＰ)代表
武藤　浩史
基盤研究(社会・地域連携)代表
羽田　功
日吉研究室運営委員会委員長
小宮　英敏
基盤研究座長(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)
伊藤　行雄
基盤研究(身体知プロジェクト)座長
武藤　浩史
日吉行事企画委員会(HAPP)委員長
小菅　隼人
極東証券寄附講座運営委員会委員長
鈴木　晃仁
日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長
坂本　光

交流・連携プロジェクト代表
横山千晶(2010年10月から)
日吉メディアセンター所長
羽田　功
日吉ITC所長　種村　和史
体育研究所所長　植田　史生
外国語教育研究センター所長
境　一三
自然科学研究教育センター所長
青木健一郎
日吉キャンパス事務長　安田　博
日吉学生部事務長　石井　宜明
日吉メディアセンター事務長
風間　茂彦
日吉事務運営サービス課長
黒田　修生

教養研究センター

組織構成

2010年4月1日～2011年3月31日

所長：横山千晶（法・2010.9.30まで）、不破有理（経・2010.10.1から）
副所長：不破有理（経・2010.9.30まで）、武藤浩史（法・2010.9.30まで）、種村和史（商）、吉田恭子（文・2010.10.1から）、大出　敦（法・2010.10.1から）
コーディネーター：坂本　光（文）、伊藤行雄（経）、長田　進（経）、境　一三（経）、鈴木晃仁（経）、武山政直（経）、羽田　功（経）、篠原俊吾（法）、武藤浩史（法・2010.10.1から）、横山千晶（法・2010.10.1から）、佐藤　望（商）、金田一真澄（理工）、熊倉敬聡（理工）、小菅隼人（理工）、安田　博（キャンパス事務長）、柴田浩平（教養研究セ）
広報担当：不破有理（経・2010.9.30まで）、吉田恭子（文・2010.10.1から）

日吉行事企画委員会（HAPP）
委員長：小菅隼人（理工）
委員：坂本　光（文）、石井　明（経）、羽田　功（経・2010.9.30まで）、不破有理（経・2010.10.1から）、下村　裕（法）、佐藤　望（商）、竹内美佳子（商）、森吉直子（商）、小宮　繁（理工），森　泉（理工）、杉山由希子（理工・2010.10.1から）、石手　靖（体研）、河邊博史（保セ）、安田　博（キャンパス事務長）、黒田修生（運営サ）、土田平和（運営サ・2010.10.31まで）、加賀斉天（運営サ・2010.11.1から）、湯川哲史（学生部）、宮崎俊明（学生部・2010.10.31まで）、屋部　史（学生部・2010.11.1から）、山崎健二（学生部）、風間茂彦（日吉メディアセ）、遠藤恭子（日吉メディアセ・2010.10.31まで）、酒見佳世（日吉メディアセ・2010.11.1から）、日水邦昭（教養研究セ）、岩渕重夫（外国語教育研究セ）、小関克明（社会・地域連携室・2010.5.31まで）、大賀　裕（社会・地域連携室・2010.6.1から）

極東証券寄附講座運営委員会
委員長：鈴木晃仁（経）
委員：宇沢美子（文）、小瀬村誠治（法）、足立典子（商）、鈴木　忠（医）、高桑和巳（理工）、鳥海　崇（体研）、乙子　智（慶大出版会）、柴田浩平（教養研究セ）

日吉キャンパス公開講座運営委員会
委員長：坂本　光（文）
委員：新島　進（経）、山本賀代（経・2010.9.30まで）、不破有理（経・2010.10.1から）、大出　敦（法）、下村　裕（法）、上村佳孝（商）、コミネッティ，フィリップ（商）、中澤英夫（医・2010.9.30まで）、寺沢和洋（医・2010.10.1から）、荒金直人（理工）、前野隆司（SDM研究科）、佐々木玲子（体研）

教養研究センター事務局
柴田浩平（事務長）、日水邦昭、山口　中、甲賀崇司

2010 年度の主な活動記録

Date		Events
4		極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅲ」開講　(春学期)
	7 日	教育 GP 関連企画「洗練された言語力を養う：レトリックとデザイン」(春学期授業)
	20 日	教育ＧＰ関連企画「コミュニティ菜園プロジェクト」　(4 月 27 日まで 3 回)
5	8 日	極東証券寄附講座「生命の教養学」(5 月 22 日まで 3 回)
		HAPP 新入生歓迎行事「塾長と日吉の森を歩こう」
	10 日	「学び場プロジェクト」ピアメンターによる学習相談アワー　(7 月 9 日まで)
	18 日	HAPP 新入生歓迎行事「『あなたの悩みに効く 1 冊』を本のソムリエが紹介します」
	19 日	教育ＧＰ関連企画「メディアデザインワークショップ・シリーズ@三田の家」
	22 日	日吉キャンパス公開講座「実験で学ぶ気象の教室」(6 月 12 日まで 4 回)
		日吉キャンパス公開講座「自分の位置を正確に知る方法の決定版　GPS の原理と応用」(6 月 5 日まで 2 回)
	26 日	教育ＧＰ関連企画「社会学のフィールドワーク――活動／障害・性・生への参与観察」
	27 日	HAPP 新入生歓迎行事「細江英公　写真と舞踏を語る」
6	4 日	教員サポート「メディアセンター・サービス活用術――KOSMOS の新機能と使い方 , 図書館資料の利用と著作権」
	5 日	日吉キャンパス公開講座「理系・文系・ダンス系――生きること、学ぶこと、動くこと」(6 月 19 日まで 3 回)
		教育ＧＰ関連企画「実験授業　エディティング・スキルズ」開講
	12 日	日吉キャンパス公開講座「体と頭でハムレット――演劇と映画」(6 月 26 日まで 3 回)
		極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ　サイエンス・カフェ 18「田んぼのエビ ── 魚屋に並ばないエビ」
	14 日	教育ＧＰ関連企画「世界の今に目を向けるための映画上映会」その 4
	15 日	教育ＧＰ関連企画「動く教室」── 体と頭を刺激する健康コミュニティ ── (9 月 28 日まで毎週火曜日)
	21 日	HAPP 新入生歓迎行事「モナリザを描く～林原　国際映画祭 ‘希望の星’ より～」(26 日まで)
		HAPP 新入生歓迎行事「環境週間」(26 日まで)
	26 日	日吉キャンパス公開講座「バッハ～深遠なる魂の響き～を聴く」(7 月 3 日まで 2 回)
	28 日	HAPP 新入生歓迎行事『戦争とドイツ平和の子どもたち～絵本　「マリアンナとパルーシャ」展』(7 月 3 日まで)
	30 日	HAPP 新入生歓迎行事「詩と舞踏のセッション /21 世紀の ultrasmart 閃光のスフィアレクイエム」
7	2 日	教育ＧＰ関連企画「THIS IS KYOGEN　言葉× 身体× 感性」
	3 日	HAPP 新入生歓迎行事「ショパン･シューマン生誕 200 年記念音楽祭」(7 月 14 日まで 4 回)
	4 日	教育ＧＰ関連企画「動く教室番外編――私の哀しみと出逢う」
	17 日	教育ＧＰ関連企画「古典に親しむワークショップ シェイクスピアを遊ぶ」その２　(7 月 18 日まで 2 回)
8	1 日	教育ＧＰ関連企画「世界の今に目を向けるための映画上映会」その 5
	9 日	極東証券寄附講座「身体知――創造的コミュニケーションと言語力」特定期間集中 (8 月 14 日まで 6 回)
	31 日	第 2 回庄内セミナー「庄内に学ぶ〈生命〉のつながり――心と体と頭と」(9 月 3 日まで)
9		極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅡ・Ⅳ」開講 (秋学期)
	4 日	教育ＧＰ関連企画「地域との対話――表現とコミュニケーションのためのボイストレーニングワークショップ」
	6 日	教育ＧＰ関連企画「実験授業　アートと文学――ワークショップ　Alfred Tennyson “The Lady of Shalott” の創造的解題：英語版創作をめざして」(9 月 8 日まで)
	11 日	教育ＧＰ関連企画「初年次教育学会ワークショップ」
	12 日	教育ＧＰ関連企画「非構成グループエンカウンター」合宿ワークショップ (9 月 16 日まで)
	14 日	センター運営委員会
	25 日	日吉キャンパス公開講座「読むことの過去と未来」(12 月 11 日まで 10 回)
10	2 日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ　サイエンス・カフェ 19「宇宙飛行士の見えない命綱～宇宙滞在期間を決める宇宙放射線被爆～」
		教育 GP 関連企画「看板づくりワークショップ」(芝の家コミュニティ菜園プロジェクト)

Date		Events
10	4日	「学び場プロジェクト」ピア・メンターによる学習相談アワー（2011年1月19日まで）
	5日	教育GP関連企画「慶應『動く教室』～体と頭を刺激する健康コミュニティ～」(12月21日まで10回)
	7日	HAPP学生企画「銀河鉄道の夜」(宮沢賢治原作の舞台「銀河鉄道の夜」を上演)
	14日	教育GP関連企画　実験授業「心をひらく体をひらく～初心者のための瞑想入門～」(2011年1月13日まで6回)
	16日	HAPP学生企画「KEIOフットサルアドベンチャー2010～君は目を閉じてサッカーができるか～」(フットサル、ブラインドサッカーを通じた、学生や地域住民の交流)
	25・26日	HAPP学生企画「Diverta!!3 -Tastiera-」(ジャグリング・マジックを中心とした新しいタイプのステージパフォーマンス) (26日まで)
	27・29日	教育GP関連企画・HAPP教員企画　「Hiyoshi Poetry Festival 2010」(日・仏・英の言語横断的詩の朗読会と現代詩朗読のワークショップ)
	27日	教育GP関連企画「アーサー王 ワークショップ第二弾　身体がつくる言葉，詩，オイリュトミー～笠井叡が舞う　Lady of Shallot～」
		HAPP学生企画「City Sonar」(日常に溢れる「電波」を目、耳、感覚で「感じる」ための作品) (11月1日まで4回)
	30日	HAPP教員企画「建築パフォーマンス / Architectural Performance」(パビリオンを作ることによって、建築のパフォーマンス力を生かすプロジェクト) (11月13日まで)
11	5日	教育GP関連企画「アーサー王 ワークショップ第三弾　テニスン「シャロットの女」～創作のための物語分析～」
		「センター選書」採択（『「牧神の午後」――マラルメを読もう』、『心に伝わる言葉をデザインする』、『触れ，語れ――浮世絵をめぐる知的冒険』
	8日	庄内セミナー「庄内フェア」　食事・スナック(11月13日まで)・図書(11月27日まで)
	12日	庄内セミナー「鵜渡川原人形展示と色付け体験」(11月17日まで)
	13日	庄内セミナー「成果報告会」
		極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ　サイエンス・カフェ20「ミクロのガラス細工――珪藻が地球を救う!?」
	19日	基盤研究 身体知研究会「瞑想(的)体験を通して身体知を深める学習法の考察」
	28日	教育GP関連企画「古楽器で奏でるバロック時代のトリオソナタ」
12	6日	HAPP学生企画「Exodus gallery 2010」(21世紀の文化のあり方を考える、学生主体のアート集団による個展) (12月15日まで)
	13日	教育GP関連企画「手作り本の世界」(手作り本を図書館に展示) (12月22日まで)
		「日吉映像フォーラム　ショートフィルム・ティーチ・イン」
	18日	教育GP関連企画「世界の今に目を向けるための映画上映会」その6
1	7日	教育GP関連企画「アーサー王 ワークショップ　創作発表会」
	11日	教育GP関連企画「慶應『動く教室』～体と頭を刺激する健康コミュニティ～2」(3月15日まで10回)
	12日	教育GP関連企画　慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会「小編成器楽・声楽アンサンブル実践と言語知の獲得」
	14日	教育GP関連企画　教員サポート「学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿――同質集団の中の孤独」
2	5日	教育GP関連企画「世界の今に目を向けるための映画上映会」その7
3	5日	教育GP関連企画「怒りと対人葛藤に創造的に向き合うワークショップ　入門編」
	6日	教育GP関連企画「シェイクスピアを遊ぶ！」第3弾～『夏の夜の夢』を歌おう！～
	10日	センター運営委員会
	11日	教育GP関連企画「詩×打楽器　即興の夕べ」(中止)
	22日	教育GP関連企画「非構成エンカウンターグループ――コトブキに眠り、かどべやで語る」(3月24日まで) (延期)
	31日	教育GP関連企画「身体知教育を通して行う教養言語力育成」中間報告会

慶應義塾大学教養研究センター
2010年度 活動報告書

2011年7月29日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　不破有理

〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-563-1111（代表）
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

編集・制作　慶應義塾大学出版会
印刷・製本　（株）太平印刷社

©2011 Keio Research Center for
Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。